

証の権威



麻生路郎☆主宰

七月号

No. 434

Pensoj flugas trans la land - limon
THE SENRYU ZASSHI



いよいよ迫る川柳の祭典！

7月7日(日)午後一時

第十回 川柳まつり

日時 7月7日(日) 午後一時
会場 北極星

大阪市南区難波新地四番丁四
(地下鉄ナンバ駅北東出口東
スグ) 電話六四一局一二七五
代表 エレベーターで四階へ

司会 川村好郎
開会の辞 中島生々庵
挨拶 麻生路郎

柳話 大阪城の話(大阪城の歴史を岡本良一氏
「本心」(三句) 若本多久志選
「円満」(三句) 松江梅里選
「風変わり」(三句) 清水白柳選
「星」(三句) 正本水客選

出、席者も特別課題、兼題全部、各題句箋別紙
・裏面に雅号明記六月末、日本社着便のこと
席題 当日 三題発表(各題三句)
★特別課題「先見」(三句) 麻生路郎選

呈賞 ★各題天地人・各題天位から露郎選によ
り不朽洞賞

余興 有志諸家
閉会の辞 吉田圭井堂

会費 百五十円(参加者全部におみやげ進呈)
懇親宴 会費六百五十円(同会場において5時半
から7時までの予定)

★投句だけの方は郵券五十円同封(切
6月末日)

大阪市住吉区万代西5丁目25番地

川柳雑誌社

電・大阪(671)6081

川柳踊り

須崎豆秋 作詞

(1)

路郎先生の誕生日ヨイヨイ

蔵を召すたび若くなる

川柳祭だ よいとさのさ

手拍子そろえて踊ろうよ

サノヨイヨイ

(2)

月が出た出た月が出たヨイヨイ

不朽洞から月が出た

あんまりお月さんがでかいので

世界の隅まで照らすだろ

サノヨイヨイ

(3)

一句出た出た一句出たヨイヨイ

ぎよっとするよな句が出来た

あんまり選者が辛いので

天かと思たら没だった

サノヨイヨイ

★川柳まつりも本年で十回になりました。
た。大いにおまつり気分になり、今
後の川柳界に雄飛してください。

★地方からご参加の方には宿のお世話
もいたしますから大会委員へ申込ん
で下さい。

不朽洞句帖

麻生路郎

人相も肝腎や 蜘蛛殺される

イゴイスト 小さな親切さえもせず

〔「立身樹園詩話」の富安を顧みて（二句）〕

トーチカの中でも非力者実力者

トーチカの壊滅 花は咲けども

もういいよ お前とこのインスタント料理なら

交通マヒを横に曲って喫茶に居



川柳雑誌七月号目次

不朽洞句帖……………麻生路郎……………野尻弘
川傍柳初篇研究（四）……………麻生路郎……………（3）

川端柳風・高須啞三味・前田喜代人
柘植金治・清博美・藤井和雄
丸十府・岡田甫……………（12）

福田山雨楼氏の思い出……………浜田久米雄……………（11）

名句と難句……………麻生路郎……………（4）

落書帖提唱……………今西生薑……………（20）

大窪川柳人一堂に会す……………東野大八……………（34）

坐りのよい句を作ろう……………直原七面山……………（21）

リレー句評……………梅志・曉明……………（28）
回天子・涼人……………（28）

窓口談義……………麻生路郎……………（18）

★現代柳人録……………（18）
★川柳書架……………（31）

勿体ない……………本多柳志……………（33）

特集 風呂で会った人……………清生・清子・生薑……………（25）

★街で拾う……………文秋・曉明・半休……………（29）

★街で拾う……………圭井堂（32）……………（39）

★街で拾う……………方大氏の巻……………（32）

大万川柳「宿命」発表……………富士野鞍馬……………（32）

明治・大正柳誌順礼……………奥津啓一郎……………（31）

★……………麻生路郎……………（6）

川柳……………麻生路郎……………（6）

同舟近詠……………諸生路郎……………（27）

近作柳……………北川春郎……………（20）

金泥……………麻生路郎……………（30）

各地柳……………麻生路郎……………（30）

★柳界展望……………乃選……………（41）

★柳界展望……………乃選……………（41）

★柳界展望……………乃選……………（41）

★柳界展望……………乃選……………（41）

★柳界展望……………乃選……………（41）

★柳界展望……………乃選……………（41）

★柳界展望……………乃選……………（41）

★柳界展望……………乃選……………（41）

★柳界展望……………乃選……………（41）

★柳界展望……………乃選……………（41）



川柳 名句と難句

麻生路郎

な目で見られるのはイヤだから特に名は挙げないことにする。この碑によって幾人かでも文学に眼が開いて呉れば幸いであるといっておこう。

〔五二〇〕

万葉の山けずりゆくブルドーザー

(晃)

万葉の山という山がある訳ではないが、奈良朝時代の多くの歌人が詠んだ万葉集の中に詠みこまれた植物のある山を作者が仮りに万葉の山といったのである。その山肌を、世代が変わると、カンナで艶節をけずるように、ブルドーザーでいとやすやすとけずっているのを見て、奈良朝時代と現代との対照に面白さを感じたのであろう。

ブルドーザーは土砂の掘鑿、盛土、地均らしなどをする万能土木機械である。郊外や山裾などで、よく見かけるが、なかなか蜜カラな姿をしているが威力は大したものらしい。万葉と聞いただけでも優美な感じのする山を、この怪物的な文明の利器で、削ってゆくのだ！ 特に詩情は湧かなくとも一つの発見といってもいい句であらう。

〔五二一〕

永平寺因参

雲水のコケシ並べたように立ち

(村鵬子)

永平寺へ参詣すると、若い雲水が沢山いる。なかなか容易ならぬ修行らしいが、案外明るい顔をしている。今時どうして雲水

〔五一六〕 朕富めり電化製品行きわたり

(雄声)

高き屋に登って、民のかまどに、煙りが立ちのぼっているのを眺めた仁徳天皇が、「朕富めり」と仰せられた古事から、「朕富めり」の上五を借用した句としては、なかなか気の利いた句である。ユーモラスであり、皮肉味も感じられる。

天皇にこの句をデジケートしたとして、果して「ワタシもそう思います」と、いわれるか、どうかは判らないが、苦笑されることは間違いないまい。

〔五一七〕

社長今日チャーチル会のベレー帽

(王石)

社長であって、絵筆も揮う。そこでチャーチル会の会員となる。イヤ。オレは俗人でないぞといったために、チャーチル会

に入会して絵筆を握るようになったといってもいいだろう。だから画家としてのベレー帽を先ず冠らねばおさまらないのである。まことにはおえましい社長さんである。

チャーチル会というのは英国のチャーチル元首相が素人画家として有名であるところから、日本で素人画家、いわゆる日曜画家が結成したある会にこの名をつけたのである。宮田重雄氏等を先生として、作家、女優、実業家など著名人を会員としている。

〔五一八〕

目印がヒチ屋と云うも気に入った

(蔭児)

「又、渠を変えたよ。ヒチ屋の辻を西へ曲った二軒目で、ロケット荘というアパートだ」というのである。

目印がヒチ屋とは、ヤツらしいムード

が、どことなく出ていて気に入った。早速、カメラでも曲げて、サントリーでも持ちこみ、引ッ起し祝の乾盃といくか」

ヒチ屋は質屋のこと。東京ッ子が日比谷をシビヤというほど、大阪ではシをヒと発音することは稀であるが、昔からシチャといわずにヒチャといひもし、書きもしている。これは段訛だそうである。

〔五一九〕

死後に碑を文学解せざる故郷

(清生)

詩聖、歌聖、俳聖などと崇められた文学碑が、死後に故郷に建碑されるが、その多くは生前には、阿呆扱いをされ、甚しいのは狂人視され、故郷から追放同様の憂き目を見、他国で名を為した人が多いので「文学解せざる故郷」と一矢を酬いたのである。

そうした例はいたるところにあるが、変

になる気になったのであろうか。

作者は団参の一人であらう。ズバリ並んだ雲水をコケシ並べたように立ちと感じたのである。それほど、アタマはツルリと刺って、おおおとして、清浄そのもの。全く人間はなれがしているのだ。

〔五二二〕

分譲地ゴム長いるとは知らなんだ

(敏行)

分譲地を新聞広告で見ると、きまっとうに、駅から徒歩で七分だとか、瓦斯、電気、上水道施設完備、潮の香りと緑の街だとか次から次へと良いことずくめで、文化住宅が思いのままに建つように呼びかけている。

定退後の安住地帯と思って、分譲地を譲受けたのはよかったが、さて住んで見ると、ゴム長がいるとは知らなかったというのである。「ソレ、ごらん、あんなところはダメだ」といったのに」と妻君からはボヤかれる始末。

分譲地に幾多の欠点のあることはいうまでもないが、それをゴム長に代表させているところが面白い。

〔五二三〕

頼らねばならぬ独り子赤いシャツ

(光郎)

子どもに頼るという思想が古いとか新しいとかいうことは別に、現実はまだまだ親という親の大半は子どもに頼っているようである。まして親ひとり子ひとりの世界では、子どもに頼ってはいないといつても

心の底のどっかに子どもに頼っているようである。

そんな親にとって、近ごろの子どもはとうであらう。見た眼に、頼りになれそうな頑強さが少しもないではないか。ひよろひよろ、根深かのように背が高いのは、まづいいとしても、昔の火消しのような細いズボンをはいて、上着といえ、女の子のように赤いシャツを着て、弱弱そのものに見える。頼らねばならぬ子どもが、こんなありさまはとても心細くてやりきれないと詠んだのである。作者は所した近ごろの親ごころに巧みにメスを当てている。

〔五二四〕

眼鏡のちりをゆっくり拭いて主賓席

(七面山)

主賓がどんな種類に属する人であるかは、この句からうかがい知れることは出来ないうが、いかにも主賓らしい態度の描写には成功していると思う。

落ちつきはらって、眼鏡のちりを拭く、それだけで、既に主賓として貴族は充分だ。何んの奇もないが棄てがたい句だ。

〔五二五〕

小企業社長社長ともう呼ばせ

(宏方)

夫が社長で妻が専務という社がある。人は小企業だというけれども、刻苦精勵、晝夜兼行で築きあげた社である。従業員は家族を入れても十人余りだ。

社長と呼ばれて「ウン」という声が、ノドから出る快感はハタのものには判らまい

なア。笑らわば笑らえだ。小さくとも一國一城の主になったんだ。というところ巧くつかんだ句だ。

〔五二六〕

腹たてて意見述べれば理事にされ

(桂仙)

そう君のようにムキになられても困まる。ご意見はごもつともだ。イヤ、私等の行き届かない点もある。このところはかへんべんしてもらいたい。こうして手をついてあやまる。こういう始末になってたのも、そこにはいえない事情のあつてのことだ。そのためには、是非あなたにも協力してもらいたいと思う。と、とうとう理事にされたのである。軽い穿の句だといえよう。

〔五二七〕

どの候補もどの候補も赤ン坊を泣かしに來

(求女)

「選挙日があと三日と迫って来る。慾野深造がご挨拶にまいりました。どうかよろしくお願いいたします。」と次から次へとやって来る。候補者自身は必死であらうが、こちらは折角寝かしつけた赤ン坊

が、そのたび毎に眼を覚まして泣き出すので大弱り。

「投票でやるもんか。みんなして、赤ちゃんを泣かしに來るんだもの、いけすかないわ」

これが若き主婦の真実の声

だ。選挙風景のトコマのスナップとして面白い。

〔五二八〕

出張も栄転もなく看視老け

(竹莊)

役所や病院や、会社・工場・百貨店などに看視という名の職員が多数勤務しているが、これ等の多くは元巡査、元兵隊が頑強なからだを資本に就職した人たちが多い。しかも社会で一役果して来た恩給組がかなりいることである。眠むような物憂そうな眼をして、出入りの人たちを看視している彼等には何んのくったくもなさそうだが、暴風雨の夜でも、警戒の責任は重いし、時には深夜に強盗盗とも闘わねばならないのだ。

ところが、この職業は下積み視されているだけに、一般職員のように、出張もなければ、栄転もない。そのうちに、木が朽ちるように、老けて、いつのまにやら消えて行くのだと詠んだもの。この句は看視を客観的に詠んでいるが、主観的に詠めばもっと強い、すぐれた句になったであらう。



結婚式場 長生殿

近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場 貸衣装も
豊富にそろえております ● 6階



大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171



川柳塔

麻生路郎選

故郷よし山川草木みな匂い

そろそろ停年そろそろ女の始末をし

流石女将貰いだ金に振り向かず

パパとママに子は宿題を配って寝

鳥取県 河村 日満

家族紹介孫も附録にして加え

下駄箱の上で桜がすこし咲き

膝枕すこうし禿けてきましたわ

豊中市 足立 春雄

フレッシャー自然に勝てず海の底

倉敷市 木村 千容

長生きをせよと権禰宜ねんごろに

母の日にせめて小遣せびるまい

倉敷市 田垣 方大

秒読みをするよう定年近かついた

同県とわかり商談すらすらと

米子市 小西 雄々

善人が怒り根性を見直され

ためらわず脱いだモデルにおじけだち

松盛百男を迎える

頂上はかすんで見えすまだ百歩

大阪市 山川 阿茶

大阪市 市場 没食子

カチユーシヤを想い出す程雪が降り

豊中市 若本 多久志

良縁と思えど息子横を向き

人生の垢かこんなな古道具

薩摩と日向紀行

噴煙は何を怒るや桜島

大阪市 正本 水客

娘の婿もビール一本ほどでよし

筋通す癖老いてなお

犬吠る声を近所に聞かしとく

高槻市 丸尾 潮花

定退へ五勺の酒が呑みきれず

伸びをして歳の疲れを口にせず

大阪府 西 いわを

株屋へ行くらし同年輩が駅に

又出て来いと退めた人へ世辞

大阪市 北川 春葉

淋しさは眼鏡をかけたまま眠り

母の日も結局父はさかなにし

大学のそろそろ父の前で嗅い

ハワイ 羽佐間 柳葉

無精髭気にせぬ程に老化せり

光ある処蔭ある処世術

堺市 吉田 圭井堂

クーラーの効き目をなじる家かいな

背広着た案山子の方が効き目あり

直ぐ補正を組める日本のありがたさ

防府市 長野 井蛙

他人とは思いませんと借り倒し

共稼ぎ個人負担の映画を見

岡山県 直原 七面山

雲に鳥芭蕉は人を近づけず

トビがタカ産んで土工にある苦勞



人不足ふるい滓^{かす}まで高姿勢

お芝居の様に女優は別れたり

英語しかわからぬ犬を貰いうけ

大阪市 金井文秋

時刻表立読みだけで足る旅行

立候補おんな女に味方せず

加賀市 那谷光郎

何させてもあかんと荷造りやり直し

電化して人間無精になる文化

善人の父食卓は又塩こんぶ

大阪市 福井野迷路

花時は違^{ちが}わず時計は狂えども

岡山市 浜田久米雄

退職の友を玄関まで送り

三日目に帰る車掌のひげがのび

年金の胸算用をして眠り

出雲市 尼緑之助

礼詣り出雲大社に雨ぞ降る

まだ続く祝辞末席栓を抜き

大阪市 水谷竹荘

張り込みのつらさは風を引いてまで

共稼ぎするやないのと無理に添い

浮気して妻より二号につめよられ

余技だけで暮らせるくらいうらやまれ

さんばつ屋一条乱れず仕上げたり

啄木も貧しかったとなくさめる

柳井市 弘津柳慶

母の日は昨日だったと若夫婦

口下手な夫婦で小金蓄めている

鳥取市 杉谷湖山

晴れるのを待たずに桜散りはじめ

味噌汁に今朝は何んにも浮いて居ず

京都市 大鶴喜由

わが顔は塗ってはたいてからのもの

去るもよし母が選んだ妻なれば

美しく涼し女は夏のもの

天気晴朗富士は二三丁先に見え

太い尻を運ぶに太いふくらはぎ

尼崎市 小林文月

通過駅知らずに上戸はのんでおり

奈良県 飯降白香

冗談もしらけた一座をもてあまし

ためいきとあくびでつとめはすましとき

奈良県 西辻竹青

よく見れば二号の母の若いこと

思い出の土地と転任泣いて去に

呉市 林野甍光

生活力がないと見られて破約され

勘違い結婚しようとは云わなんだ

岡山県 福島鉄児

一人寝て見れば成程広い家

病情を聞く長距離へ秒刻む

岡山市 服部十九平

五百羅漢半分程は鼻が欠け

口下手が隣へ督促状を書き

尼崎市 長谷川三司

命尊し万物はみな影をもち

孤独とは淋しきものよ影さえも

西宮市 若林草右

貸本が豆殻入れて戻って来

おしめ吹いた風に揺れてる鯉鱈

暴力の世に拘摸の手の器用さよ

拘摸に眼をつけられた程持っていず

岡山県 田村藤波

花見酒追加に誰も異議がない

玉島市 白井三林坊



サングラス悪をたくらむ貌にする

猪がとれた記事などローカル紙

紫の衣に遠き恋心

児島市 本田恵二朗

干満の汐にいのちのある如く

座敷より日向がいいと友老いぬ

鳥取市 森本法泉水

妻入院一ケ年

病室の朝の話は便のこと

吹田市 橋本幸男

遠縁ですと候補者やってくる

堺市 高崎雄声

シームレス電車の中は花ざかり

病気癒ったで信仰やめにする

島根県 藤井明朗

老妻の推理ますます磨きかけ

山陰の旅傘の用意までも妻

岡山県 永松東岸

花見でも雨でも飲める男たち

前歴を聞けば手を振る守衛さん

背伸びした土筆をさけて尻すえる

倉敷市 野田素身郎

任されて出すぎたことを後悔し

新緑に負けない色を女着る

連休疲れてネエと役人うそぶけり

若屋市 丸川初甫

ふりむかぬ歩調月光背に受け

人一倍楽しんどういて倦怠期

岡山県 池田古心

口だけはまだまだ女欲しがれど

小平市 石居高志

つぎ貼りの上手さやつぱり世帯じみ

末娘入学

気にかけることはなかった友が出来

大阪府 早川清生

魚屋へ八百屋へ妻のなれなれし

青空に気がつき職を厭いおり

堺市 辻圭水

恋文も書かないくせに字を習い

大阪市 児島与呂志

老人だけ市電の味を知ってくれ

岡山県 野々口美舟

鏡台で挨拶をする共稼ぎ

手術する母の入歯をたくされる

西宮市 小浜牧人

養子社長に骨があったを見損ない

ゴルフから小唄と抜け目なく泳ぎ

名古屋市 菱田満秋

キャバレーを三日休めば墮しとか

狭くともおしめが洗濯機を買わせ

岡山県 池上知恵美

生きることに懸命なりし故人の日記

大阪市 橋高薫風子

あぶら足安サラリーを象徴し

親子の流浪夫婦の流浪より切なし

因襲は亀の甲羅の重たさだ

下関市 中村九呂平

退職金電話の出物に気を引かれ

事務的の祝電だとは見抜いてる

奈良市 宮口笛生

煙吐く汽車の機関士まだしてる

近代化が蒸気機関車歩詰めにし

背伸びする終着駅の夜がしらみ

大阪市 西川晃

ゼニがない位のことであけずとも

因敷を解いて長女に見直され



スモッグの街で古武士のように生き

重恵の弟

白壁へどす黒い死が染みていく

莊嚴に滴たり落ちる輸血の血

神戸市 仲どんたく

長女嫁く

新家庭タンスとテレビの谷で住み

天王寺動物園にて

象悲しリンゴ一つへ芸を見せ

雨けむるオランウータン閑な顔

平田市 久家代仕男

お客の唄に勝手にて和し

勉学は誰のものぞと叱り置く

大阪市 本多柳志

寝て読めば葉根譚も面白し

芸だけでめしが喰えてるとはおかし

出雲市 原 独 仙

町内野球あれから父ちゃん寝ています

つまみ喰い噂の筈だ土地を買い

一生涯嫁かぬと言ったに子が二人

新潟県 高野むじな

お手伝さん手伝う程も仕事せず

野球嫌いがいるのをテレビ知らぬのか

大阪市 石倉旅風

府議市議と商売になる共稼ぎ

外れたら濡れて帰れの氣象台

スモッグの空には映えぬ鯉のぼり

大阪市 魚住満潮

続西成界わい

母の日も母は地下足袋はいて出る

競馬競輪まだその上に女ぐせ

質流れの時計女房と覗き込み

刑務所を出て真直ぐに西成区

二十ほど違う女と玉出に居

サービスをするとは身体からだのことらしい

愛媛県 村上旭童

やめる気もないがちぎって吸うてます

なんぼ縄なうても雨の日がつづき

神戸市 傍島静馬

雑草を刈りつつ散髪思い出し

峠道越すまでバスで祈ってた

僕の太陽云うてた妻をこきつかい

大阪市 仲谷ハナ子

酔ばらい天国大仏さまの御手にのり

大阪市 平沢保美

自家用に乗り馴れて視野狭うする

市電から自家用車族見下しぬ

失敗しましてんと婦人科へ共稼ぎ

布施市 森下愛論

歌でない歌を唄ってパパの酒

大阪市 河井庸佑

スリルある場面へ箸を持ったまま

女とはムードに弱いものを知り

大阪府 谷沢好祐

手も握らずにサービス料は取り

泡沫の候補へ入れた臍曲り

堺市 高津徹也

地方出のたくまじきかな地方弁

おふくろに別な口実つくつく

愛媛県 榎 紫 光

やりくりの店とも見えぬ銀座街

盆踊りへ妻子を出して牌をませ

息抜きに社長工場を視察する

青森市 工藤甲吉

囲われて生ける玩具となりにけり

混浴へそれは程よく湯気が立ち



千日手みたい依然と平でいる
ささやかなくらしなれどもゴミたまる
前金切れげに光陰は矢の如し

松江市 小林孤呂二

陳情に押しきられそうな雨の量

ドテラ着てすっかり仕事のこと忘れ

大阪市 今 西 生 置

気を吐いて来たといい気でしゃべってる

京都市 室井八九寸

家を放つとき町内浄化熱

要件に触れずに市外三通目

岡山县 横山 一声

紅一点低いお鼻が目にあたず

新築の蠅一匹を追いまわし

小松市 関戸宗太郎

あいの子という悲しみを犬も知り

失敗を願うが如き野党にて

石川県 高山 涼 髪

当選を当然という笑いよう

君のゆめ僕のゆめストセにやならず

美禰市 安平次弘道

経理課は我が社の株高不思議がり

婦人科は子の欲しい顔といらぬ顔
気短かが多いなと信号機も思い
月賦月賦冠婚葬祭まで月賦

宇都市 平田 実男

捨てるには惜しい息子の靴をはき

刑終えた息子を母の目がかばい

諫早市 川岡 靈眼子

やけ酒も程度をこせば笑わせる

蚊に食わす血が体内にまだあった

雨だれの妻と寝た夜の慕情めき

御系譜の名も長々と血でつなぎ

貝塚市 杉本 一鶴

当選をすれば手ぶらでは腰あげず

無知でのんきな母なればこそ生きて来た

富田林市 浅川 八郎

ライバルが優しいお姉様とは悲し

岸和田市 内藤 きさ子

清き一票夫にさえも嘘をつき

葉草を摘んできたままほったまま

犬に引張られ小柄がなお目立ち

腹立ちを一気に書かすボールペン

青森県 木村 凉人

両陛下植樹祭に来青

あやかって林檎を植える植樹祭
先生と呼ぶなど言って左派議員

大阪市 唐崎 専翁

天の父地の母罪の子をつくり

キリストへ罪を被せて今日も生き

二千年きのうのように牧師言い

敵をさえ愛する心構えて居

倉吉市 奥谷 弘朗

係長ぐらいで保守党好きになり

純情な奴で三味線がまだ弾けず

兵庫県 遠山 可住

落第させといて俺に言わんかい

恩給へやつとどいて中風が出

兵庫県 河原みのる

宅地となるまでは石を拾うわん

判官の切腹憶う桜散り

阪鶴国道開通

儲けないうちから農家どつと減り

姫路市 隠岐 不醉

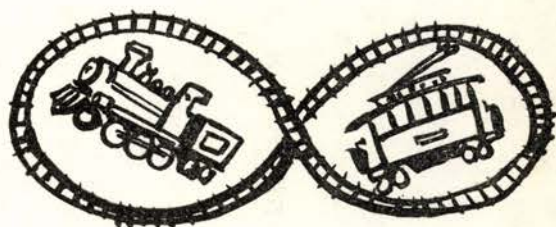
婿選びする気で書こう投票日

福田山雨楼

氏の

思い出

浜田久米雄



私が川柳をはじめたのは昭和八年十月で、和田駅から大鉄局経

理課調査係へ転動したためであった。というのはその時分局に川柳雑誌大鉄局支部柳社というのがあり故植山九天氏にすすめられて入会したのがきっかけである。当時の直接の指導者は故福田山雨楼氏で毎月一回の例会には必ず定刻に出席されていた。山雨楼氏は湊町保線事務所に勤務されていて、八尾市に居住されていたが、氏の隣に住んでいた関天八氏（本年退職）が同郷でありおとなりであり川柳雑誌社の重要な役割をしておられた山雨楼氏を大鉄局

支部の指導者としてお迎えしていたのである。私も岡山県人であるから趣味の上とはいえず奇しくも不思議な因縁であった。私が入会した当時のメンバーは故九天、故木履、故明坊、天八、某人、水客、一生、秀太、一光、故杏林、喜山、ひかる、万内らで山雨楼氏の指導で句会、吟行に精進していたのである。山雨楼氏は常に制服制帽で鼻下にひげをたくわえ勤厳実直という言葉は氏のために作られたような感じであった。

秋の吟行で醍醐寺へ行ったこと

があったが先へ行かれる氏が道の端に佇んでいる牛の顔をじっと見ておられる状態に接した。われわれも氏のしておられるように牛を立て見るわけにはゆかず、またその必要もないので氏の傍をとおりに抜けて先へ進んだのであるが、それから一年ほどして句会の兼題に「土埃」山雨楼選がありその軸吟に

土埃牛の目玉は涙ぐめ

山雨楼

と発表せられたので私は一年前のあの時のことを思い起こして、この句は一年前に着想としてしまいい込んでおかれたものだ。川柳を作るためには常にいろいろな状態をくわしく見ておかねばならないものかとしみじみ感心したのであった。

しばらくして昭和十年であったか山雨楼氏は本省へ栄転せられ工務局保線課人事係に勤務せられることとなり横浜市保土ヶ谷区岩崎町に転居せられた。ちょうど大阪駅の高架線が完成した直後で上りのホームから当時の三等寝台車で単身赴任される氏をみんなでお送りしたのであるが、その時の句に

温容を見送る寝台車の重味

久米雄

というのがある。

現在でも川柳雑誌社関係の柳人のなかに国鉄職員が多数おられる

が、その元はといえば大鉄局支部であり山雨楼氏の薫陶を受けた人が次々と拡がっていき職域を一つにしたグループがふえて行った。それらのグループの育成について川柳雑誌社が全面的の協力を惜しまなかった。昭和十二年から尾道、山口、下関、広島、大阪、城崎と年一回開かれた西日本鉄道人川柳大会はその大きな現われで、毎回路郎先生がご出席されたのである。

さて山雨楼氏が退職されてからのことであるが、たしか昭和二十五年の夏であったと思う。お手紙が来て岡山市の図書館に「況岡山」という雑誌を寄付したい。長年購読していま手許に相当数あるが図書館も戦火で焼失しているのでぜひこの文献を保存してもらいたいというのである。早速私が図書館長（吉岡三平氏）に話をする

と大変喜ばれたのでその手続をとって三百冊ほどのものを寄贈した。その後私は岡山駅の助役をしていて「岡山駅駅勢要覧」という

百二十頁位



ビールは
アサヒ

の印刷物を作ったが初代からの駅長の氏名、着任年月、退任年月、行先が不明なのが八人いたのを不祥として発行し、その一部を図書館に寄贈した。その後図書館から連絡があり、うちの方で全部わかりましたというのである。なんの記録からわかったかと聞けば「況岡山」という古い雑誌があってそれから発見したので、山雨楼氏が寄贈されたなから知ろうとして知り得なかった事実が発見されたわけで、ここにも氏との深いつながりを見出したわけだ。いま私の保存している山雨楼氏の短冊に次のものがある。

ちょこなんと花火工場のある田圃
とほくんと歯を抜きに行く子連れ
赤松の緑が僕を生んだ村
みなすつとたつ葱畑へ落着

同



藤井和雄氏

川傍柳初篇研究 (四)

川端 柳風 清 博 美
高須 啞三味 藤井 和雄
前田 喜代人 丸 十 府
柘植 金治 岡 田 甫

17 よく手が鳴るぞと仕廻^{しまわ}る役者附^{やくしやうづけ} 東里

高須「仕廻^{しまわ}る」は「仕舞^{しま}う」で「かたづける」こと。「役者附^{やくしやうづけ}」は「芝居の番附^{ばんづけ}」のこと。「よく御手が鳴るぞ」は、用事があると手を鳴らして呼ぶので、「はした部屋^{はしたへ}」か「侍女部屋^{しじよへ}」で、女中達が番附を見て、さわいでいる時、用人の手を叩かれて、「ほんとによく御用のある日だね」なぞと、その番附をかたづけるといふ句。

柘植「よく手が鳴る」は、役者に対して拍手喝采する「よい出し物が揃っている」といっている句と思う。

清「なるほど」「よく御手が鳴る」は「役者附^{やくしやうづけ}」にきかせてあるのだらう。

藤井「お女中衆は、役者の話に夢中、チエツと舌打ちして立つ、仏頂面が「お手が鳴るぞ」に、よく出ている。柘植・清説には賛成できぬ。

川端「礎稿に賛。「お手が鳴る」は、主人が召使等を呼ぶ時で、拍手とは違ふ。

「役者附^{やくしやうづけ}」は、一座の役者が交代する顔見世興行の際に出す番附のこと。「よくまあお手が鳴るものだ」と、役者附を仕舞っている、軽い情景の句と思う。

丸「高須・藤井・川端説の如くである。

「お手が鳴る」は「お手がなりやたがいにひざをつつき合^あい」(タル二)ともあり、強いて役者への拍手に関係づける必要もあるまい。なお「役者附^{やくしやうづけ}」については、富山房の「国民百科辞典」に詳しい解説がある。類句は西原柳雨氏の「川柳江戸歌舞伎」参照。

(二オ)

18 大ごまり^{でいごまり}嫩出女^{でいおんな}にとつかまり

閑々

前田「出女^{でいおんな}」は、宿駅の飯盛女、赤前垂等で往來の旅客を招き、夜のサービスもした。嫁と同伴のむこを射落とす手段として、嫁をつかまえたので、大変困っているという意である。「大ごまり」「とつかまり」は大げさな表現であるが、句を面白くしている。

柘植「射落とすのでなくて、出女の方が二人をからかっているのであらう。

藤井「海千山千のあはずれ女にからまれて、弱っている嫁さんのめいわく顔を想い出す。ただそれだけの句。

川端「藤井説に賛。男を射とめるのが目的ではなく、次の宿場まで行きたいと思っているのに「女の足では大変だから、今日はここで泊まっていきなさい」と嫁の方にしっこくすすめて、亭主が困っているのであらう。

高須「上五に「大ごまり」といってしまつたので、つまらない句になった。解としては藤井・近常説に賛。

丸「この嫁は、鎌倉東慶寺をさして行く嫁である。「早追ひだのに南無さんと嫌かくれ」(7オ)のように、追手を気にしつつ先を急ぐ嫁にとって、出女につかまってしまうしっこく一泊をすすめられては、世なれぬ嫁の手にはおえない。「大ごまり」が活きる所以。場所は戸塚あたりか。

岡田「夫婦づれの場合は、足弱の細君のために、大体において十里ゆくとところを六、七里で泊まる。即ち間の宿に泊まるので、出女につかまる心配は、ほとんどないと考えねばならぬ。(江戸から小田原が二十里、その中間の戸塚、程ヶ谷、藤沢あたりが、出女の活躍する宿場だが、二日行程も夫婦づれは三日行程で、出女の活躍する夕刻にからないうで通過してしまう。)人妻、即ち嫁の一人旅を嫁とはいわない。女中とか女中衆である。川柳だと「女旅」か「女中」ぐらいの表現となる。……とすると、この句で特に「嫁」が出女につかまって困まる場合は、ちよつと無理な曲解の感じがしても、丸氏説の松ヶ岡東慶寺ゆきの嫁が、やはり動かせない解となるであらう。とにかく古川柳の解は、あらゆる可能性を考え、追いつめてゆき、そこへ結論を持ってゆくべきだ、という事を知って頂くため、余計な事を書き添えた。

19 夕部の病氣とそ散で快氣也

眠狐

前田「ゆうべ(三十一日)までは、借金のことわり等で、にせ病をつかっていたが、一夜あけた今朝は元日、とそを酌んで全快祝いといったところ。「とそ散」は「とそ」の別名、元日に身体を健康を祝い祈るために飲む薬用酒、山椒、肉桂、防風等を合わせ、これをモミの三角袋に入れたもの。酒、味噌に浸して飲む。この句「とそ」を「とそ散」といって、「散」をつけ、「快氣」に配したところ行きとどいてる。

川端「元日にいけしゃあ／＼とよみがへり」

大晦日までは借金取りに重病とでも言訳していたのに「屠蘇で全快しました」と元日を祝っている情景。

高須「「屠蘇」を「屠蘇散」と面白くしたわけではなく、「屠蘇散」を入れて飲む酒が「屠蘇酒」だから、大晦日の病気が、元日には直ったという句で、もちろん借金のがれの苦肉策であり、類句も多く、今更と思われる凡句。

丸川諸説につく。

岡田「病気が直ったというのではなく、もう掛取りも来たのだから、昨夜の仮病はどこへやら、ケロリとしている。それを病気が快気したと、面白く表現したもの。」

20 い、年でおいた／＼とお金い、

川柳

前田「破礼句。「老いた」と「お痛」との言葉のかけあわせ。「い、年で」がよくきている。「お金」は「おきん」と読み、持参金附の嫁の擬人稱。「持参金」から来ている。

清「老人と持参金附の嫁の初夜か？」

藤井「成程、清君の初夜説をとる。どうせ持参金のオールドミス、うら恥かしさを「いい年で」と笑ったのであろう。「おいた」は局処の疼痛すばりに限定していいと思う。

川端「清・藤井説に賛。「い、年」になるまで処女であったことをも意味している。

高須「藤井説をとる。ただ「おいた／＼」というのが、本当に痛いかどうかは、この句からは疑問。「お金い、」が軽いから、そういつて「処女」をはのめかしている。

ると、とりた。

丸川「持参嫁の初夜。「おいた」は「お痛」のつまった語。失笑させられる。

岡田「「おいた」は「お痛」だけ、「老いた」を考えてはいけない。初代川柳時代にも少しは狂句臭のある句もあるが、ほとんど、そういう掛言葉や、かげの含みを持たせた句がないので、これも「お痛」だけでよい。第一「老いた／＼」という筈がない。持参嫁だけに、今まで誰れも手を出し手のない醜婦。だからオールド・ミスでも、純真無垢の処女は受合ひ。初夜に疼痛を訴えたのである。

正月十五日開

21 口おしさ蛭子が老つうれ残り

葉十

前田「えびす講の売出しで、その守神であるえびすに縁のあるもの（像、人形、かけ軸等）が売れ残ったのが口おししの意である。「えびす」は七福神の一つ、蛭子会。「えびす講」はところによって時期がちがうが、江戸では、一月と十月と年二度行なわれるえびす祭で、大売出しが商家で営まれ、商運を祈願して大変な馳走をする。「口おしさ」「一つ」「売れ残り」のとり合わせは常識的であるが、「蛭子が」の「が」がよくきている。

柘植「何か、裏の意味があるのではないか。」

清「蛭子が老つうれ残った、残念！ という意味だけではなさそうだが。」

藤井「これだけでは、何がうれ残っても口惜しさがピンと来ない。だるま市でだるまが一つうれ残った口惜しさと、異った意

味はどこにあるのであろうか。

川端「「えびす」と「大黒」とは組合わせて売るものなのに「えびす」だけが一つ余分に残ったという意味。（大分以前読んだ記憶で、本の名は失念）「えびす」が一つだけ半端になって売れ残ったのが「口おしい」のであろう。

高須「「一つ売れ残って口惜しい」のは判るが、どうして「蛭子」だけ残ったか。丸先生の明解に待つ。

丸川「諸説に賛。なぜこの蛭子が一つだけ半端になって残ったのかというと、当時、歳の市で、大黒の尊像を盗みとると、来る年に福を授かるという俗信が行なわれていて、これを実行するいたずら者が多かった事は類句が多い。「江戸から東京へ」（矢田挿雲氏）によると、この俗信は明和頃から始まり約五十年間続き、文化頃によりやく止んだという。

どろ／＼と大黒屋おっかける

（傍四三二）

おしげなく蛭子ハ出してみせる也

（廿三二）

あの大黒をミセやれとふといやつ

（廿一四）

えびすさま人たかへにて盗まれる

（廿五二）

大黒を買って来たのに盗んだか

（貌一六）

岡田「「末摘花群衆」に小咄まで引いて詳説せり。「年の市」の項を見るべし。

22 永の留守女房酒屋ハ直牛ばらい

眠狐

前田「「永の留守」は、「旅の留守」

「富士の留守」「伊勢の留守」等の句にも見られるように、亭主の長の不在を利用したの茲通を取扱ったもの一つである。この句、亭主のいた時は、酒はかけ買いであったが、留守の間での間男に使ったものは現金払いで、亭主が帰ってから見つからないようにしておく、という句意。茲通を取扱った句としては、そのものずばりではないが、含みのある味な句である。

藤井「呑兵衛の亭主が在宅の時は、払いもどこおり勝ちで、ついつけにしたものを、今は留守、つましやかに世帯持ち上手の内儀さん、やれやれと現金払い。別に間男まで考えなくてもよいのではないか。

川端「夫の留守中、妻が間男したこと、その酒はいつもの店では噂になるので、全然顔を知られていない店まで買いに行くので「つけ」が利かないとの意であろう。

高須「川端説に賛。茲通でなければ平凡な句。

丸川「茲通説をとる。「旅の留守内へも護摩の灰がつき」（タル八三）で、その結果は「旅知り大きな腹のま、で去り」（タル五九）というような事になる。

岡田「当時は盆暮二期が支払いの時期で、ツケが利いた時代であることをよく知っておくこと。この句、別に他の店で買ったとまで考える必要なく、かえって、とり付けの店なのに、その分だけ現金を払った……といった方が句が生きてくる。

23 船迄がけつ氣さかんに見へる也

葉十

前田「吉原通いの「猪牙舟」の快走ぶりを「けつ気さかん」といっただけの句。「船迄が」の「が」がきいているし、「けつ気さかん」の比喩も面白い。類句に、「とぶやうな舟であらうと問ひおとし」（拾一四）がある。

藤井「遊心物々、心ははや北地に飛んでうわの空、乗せる舟までさこそ思われるというわけ。

川端「確稿に賛。「ゆれ動く」かとも考えたが、舟足軽く勇み行くでしよう。

高須「原解賛。「船までが血気旺盛に見える」それで全部。

丸「確稿の如くでよいと思う。だから「後を見ぬ人の乗る故猪牙といふ」（タル五十一）ともいう。

岡田「猪突猪進である。こういう元氣な時代が羨ましい。

24 あかるい方ハ出して置^{おく}炬燵の手

龜遊

前田「男女が炬燵にいっしょにはいっている情景。暗くて目につかない方の手は、炬燵の中ににぎり合ったり等しているが、あかるい方は出しておくという意。平凡な句であるが「あかるい方ハ」は、「を」でなくて「は」であるところに味がある。

藤井「暗い方を入れておく炬燵の手」とすれば明々白白。何処に入れて何をしているやら、炬燵のみ知っているというわけ。

川端「諸説に賛。見えない方の手が恋をささやいている。さり気ない恋の描写。

高須「川柳としてはやっぱり「あかるい

方は出しておく」で面白い。「暗い方は入れおく」では露骨。確稿よし。

丸「諸説につく。「母の手をにぎって炬燵しまわれる」（タル初23）は笑ってすませるが、「亭主の手握ってすまぬ炬燵也」（傍五）となると罪が深い。

岡田「諸説に尽きる。

25 しいたの下戸内へ来て腹を立

青峨

前田「しいた」は「強い」で、無理に酒を飲ませたこと。「内」は、我が家、仲間、組合等の意があるが、この場合は仲間、即ち下戸仲間の意であらう。句意は明らか。

清「句意は前田氏に賛成。但し「内」がどれを指すか不明。

藤井「下戸」だから「強い」られたのは酒であらう。下戸は内省的な弱い性格で、女房に頭が上らないタイプだから「内へきて」は「家へ帰って」女房の前で腹をたてているのであらう。従って「内」を「ホーム」と解したい。

川端「藤井説に賛。

高須「内へ来て」は「自家へ来て」でよいと思う。藤井説どおり。女房に「飲めない口の貴郎が、そんなに飲まなくてもよいのに」といわれ、「いや無理じいをする奴がいてね」と、その強い奴に、自家で腹を立てているのである。

丸「高須説をとる。かくて「女房は酔はせた人をにちに行き」（タル初）ともなる場合もおこるであらう。

岡田「内」は「自家」説よし。帰宅し

てまで「無理に飲ませやがって」と、ブリリしている情景。

(二ウ)

26 はせをの片腕から大雨がふる

泉河

柘植「芭蕉の葉は、水腫を病む人、あるいは利尿、脚気等に服用すると良いといわれる。「片腕」とは葉を一枚ということ、小便が出なかったのが、芭蕉の葉を煎じて飲んだら、たちどころに大雨のように出たということ。

清「はせう」については、柘植氏の解くところとしても、「片腕」が判らぬ。この「片腕」が解ければ、句意も自らはつきりすると思うのだが。或いは「はせう」は柘植氏の誤りで、「はせを」に何か特別な意味があるのではないか？

藤井「宝井其角が向島の三開神社で「夕立や雨を三開の神ならば」と雨乞いの句を詠み、その句の効力で、大雨が降った故事であらう。其角は「はせを」の片腕にも当たった一番弟子だから、そう解すると「片腕」が生きてくる。それとばせうの利尿作用とをかけたのであらう。

川端「その通り蕉門の双壁といえは其角・嵐雪だから、片腕は其角のこと。其角の句で大雨が降ったというだけのこと、藤井説に賛。雨乞いの句を川柳的に表現したものであらう。

高須「藤井・川端説に賛。——但し、この句には好意が感じられぬ。「片腕から大雨が降る」とは、何とまずい表現かと思う。題にひっかかるか、何か他の思惑がある。

品質優良
タチカペン先
TACHIKAWA PEN

立川ペン先株式会社
大塚市東区常盤町一丁目十一番地

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

ったことと思われる。丸先生いかが？

前田「其角の雨乞い説に賛成。「ばせう」の葉は、蒲団の下に敷いて寝ると水腫を治すの趣のものがみられるが、これを意識して雨水との関連の上作句したのであらうか。これはすこしうがちすぎであらう。

丸「藤井・川端説賛。高須説の如く、確かにまずい表現である。謎なぞのようなもので、何らの詩趣もない。

岡田「利尿・水腫は考える必要なし。ただ其角を俳聖芭蕉の片腕といったままでだが、高須氏のいう如くつまらぬ句ではある。

27 おいらんゑくゝゑくと象の跡

秋紅

柘植「象」とは、山王祭（六月十六日）の行列のはりばての象。象をおいらん

に見立て、おいらん道中の事をいっているの
であらうか。

清「おいらん道中ではなく、おいらん道
中の時のように、象の跡に人だかりがして
いる状況を詠んだ句と解したい。」

藤井「これはよく判らぬ。象の跡の「跡」
が、象の足跡なのか、「象」の後（ウシ
ロ）なのか不明。行列の象のあとにつきな
がら、女郎の語で夢中になっている若衆達
か？」

川端「「象」は普賢菩薩を乗せる白象・
性空上人が、生身の普賢菩薩を見ようとし
て一心に祈請し、夢のお告げによって神崎
の遊女にその姿を見た。その時遊女は普賢
菩薩の姿になり、六牙の白象にのり、眉間
から光を発していた。「うらにきて聞けば
おと、ひ象に乗り」の類句のように、身受
けされた遊女の跡を、おいらんの名を呼び
ながら追っている男のことである。」

高須「川端説に賛。しかし、どうも表現
が気に入らぬ。「象の跡」などと名詞止め
にするから、藤井説のような疑問も出て来
る。」

前田「はじめ山王祭の象と思ったが、川
端説に賛成する。高須氏の表現が気に入ら
ぬには反対。この句は名詞止めにより活き
ていると思う。」

丸「跡は後で、うしろのあて字。川端説
の如く、謡曲「江口」の柳化。思えば浮世
は仮の宿と観じて普賢菩薩と姿を現わし、
舟は白象となり、白雲に打ち乗って西方浄
土へ帰ってゆく、そのあとを慕って「おい
らんよう／＼」とあとを追うのである。身

受けされた云々と考える必要はあるま
い。

岡田「江口の君についての伝説は、拙
著「川柳愛慾史」にくわしく述べてある。
参照のこと。」

28 井戸の中から鼠と猫とを上ケ

五 案

柘植「不解。ただ鼠と猫の面白さだけを
狙ったものとは思われぬが、良く判らぬ。」

①鼠を追いかけた猫が、そのまま二匹とも
井戸の中へドボン、それで井戸がえをし
て。②茄子を鼠、猫を胡瓜、井桁に組んだ
真狐の船から、その猫と鼠を取り出す
事。

「霊棚の胡瓜涅槃の猫ならん」（宮武外骨
説）

清「僧侶と踊り子の心中では、少しこじ
つけ過ぎるかな。」

藤井「年の暮、長屋全員で井戸替えをし
ていると、例年もよく思いがけない物を上
げて話題になるが、今年は猫と鼠を上げ
て、長屋中大騒ぎをしたという句、猫と鼠
がドボンと飛び込んだのを知っての井戸替
えではないであろう。」

川端「藤井説に賛。」

高須「井戸水が何となく臭い、というの
で井戸替えをしたら、鼠と猫が出て来た、
というのであろうが、どうもこの頁ギコチ
ない表現の句が多いのは何故か。」

前田「藤井説に賛。井戸替えで、鼠と猫
を上げたというだけで、他意はないと思
う。」

丸「諸説のように考えているが、どうも

これでは川柳として何の趣もない。18オ
秋紅の句にも「はらんだる物を井戸掘抱き
上る」とあるが、これも同様、柳味を解す
るに苦む。ほかに何か適解はないもの
か。

岡田「確稿の第一説だけの句。（余計な
ことながら、井戸替えは、江戸時代では土
用に行なったもの。この句は臨時の井戸替
えの場合。）

丸「再説、樽一六3ツにも「きうな井戸
かへト長屋ねこをのみ」という句が見え
るから、やはり確稿第一説の如く解すべき
であらう。井桁の破損した井戸なら、実際
こんなこともあったらと思うが、それに
してもつまらない句である。」

29 しほり上ケく紫に染

眠 狐

柘植「紫」は検校の異称。紫色の着物
をきる事が許されていた。盲人は金貨しが
多く、それでしほり上げた金によって、段
階階位が上がって行く事。その位を金で買
っていた座頭の事。
清「紫は金のか、ったかたはなり」の
類句がある。」

藤井「両兄の解釈に尽きている。」

川端「諸説に賛成。高利で貸した金を貯
めて、検校の位を買うことは、当時の盲人
の通例であった。」

高須「「絞る」と「染める」とをかけた
句。」

前田「賛「しほり上ケく」がうまい。
丸「諸説賛。「つらの皮むきたため衣染る
也」（タル三）の句もある。」

岡田「確稿の「紫の着物」は「紫の衣」
とすべきだし、また「位を金で買う」は
変。官金を献納して、官位を貰うのであ
る。」

輪講誤植訂正（前号）

十三頁上段六行目「骨に」は「骨」は。
同三段九行目は「検校の信」は「検校の
位」。同下段十五行目「頼朝郷」は「頼朝
卿」と訂正。

戦中戦後にあなたは何を喰べましたか

—— 締切七月十二日着便 ——

私たちはあの頃の
不自由な食生活に
ついては死ぬまで
忘れることが出来
ないでしょう。
文献として残こ
したいと思いま
すので出来るだけ詳
細に書いて下さ
い。
戦争記念日を前に
して弘くアンケー
トを募ります。銀
飯や錦魚酒のよう
な句も作者名と共
にお知らせ下さい

川柳雑誌社編集局



入門講座

研究題「ナイター」

清水白柳

前回の研究題の句の中に川柳塔に発表されている句と同様の句があるとの御指摘を受けて恐縮している。類想句のことは以前にも書いた事があるが繰返して申し上げることにすると、類想は止むを得ないということになる。殊に本講座のように初心の方の句にはそれが多いのは作者が身近かな着想を採り上げて作句されるからで、そうして一步一步進んでゆく過程から生まれる句はどの作家も一度は通ってゆかねばならない道なのである。そこに生まれる句は先輩がすでに詠まれている句と同想或いは類想になることは後から作句をつづけてゆく作家の宿命なのである。類想をおそれては余程の天才でない限り作句を止めなければならぬだろう。だから私は類

想恐るるに足らず、どしどし作句してその過程を一日も早く終ってその作家の個性あふる作品を発表出来るようになる日がくることを望んでいるのである。ひょうせつ、盗作のいけないことは句を創作する作家として当然のことである。時には同想或いは一字も違わない暗合の句も生まれる場合もあるが、その作家が創作したものである限り私はそれを認めてゆきたいと思うのである。その理由は余程の名句でない限り後世の史家が採り上げず自然に消滅してゆくと思うからである。ところで今回の「ナイター」は作句出来なかったといつて来られた方が二、三に止まらなかったのは残念であったが課題の果す役割の大きさに今更乍ら驚かされている。

彼女とのデイトナイターだ
しにされ 杏花

帰り打合せシネマヘナイター
一へ 八九寸

ナイターの隣りも前も二人
連れ 隆史

前のデイトの句はナイターを見にゆくのだといって家を出て彼女と待合すという面白さを持っている。中の句は若い共稼ぎの夫婦が若い兄妹かが帰りの時間を打合せてそれぞれ好きな方へ行つたという佳句である。二人連れの句は試合がだれてきて近くを見まわすとみんな二人連れなのに驚いているというのだろうと思つた。

ナイターのアベック案外おとなしい Y

というのもあったが少しものたりない句である。

ナイターでファン昼間の憂さ晴らし 繁太郎

ナイターへ行く気昼間をよく動き 岡甫

ナイターに邪魔な艶の社の帰り 蛙水

勤めのむしゃくしゃをナイターで晴らしているという句意だと思ふのだがファンという語があるのが昼間の試合に負けたチームを応援していたがナイターにはそのチ

ームが勝っているので憂さを晴らしたともとれるので、ハッキリしないのが惜しい。昼間をよく動きの句はしっかりと焦点をつかんでいるのがよい。艶が邪魔になる句も面白いが欲をいえば社の帰りの下五がなくてもよいのでこれを考えると素晴らしい句になりそうない気がする。

そわそわとナイターへ行く下駄の音 寿美司

ナイターへうちわ片手にすべりこみ O

ステテコのままナイターへすい込まれ S

酒 清



灘・魚崎

大塚合名会社醸

夕涼みのつもりでナイター汗をかき M
納涼のナイターどころか汗をかき M
五句ともテレビのナイターを見

ているのではなく球場へ出かけた句だが、下駄の音というのはよく見かける風景で下駄をつかて行くファンの姿を浮き彫りにしてよい。うちわを持って行く句は下五文字のすべりこみが拙い。野球だからすべりこみが面白いと思つたのだから狂句じみていけないと思うステテコの句もその通りだがどこか薄っぺらな感じがして頂けない。汗をかきの句もそれだけの事柄にしかすぎないのでないだろうか。

ナイターの延長戦へ見は眠り Y

延長戦バスの時刻が気にかかり 蛙水

逆転のチャンス終バスに時間なく 光道

ナイターの後半戦は軒かく H

前の句と後の句は球場での句ともとれるしテレビを見ている句ともとれるので惜しいと思う。延長戦の句は時間が気になることだけだが逆転の句はイライラしながら腰を浮かせているのまで眼に見えるようである。

ナイターが終り浪曲又終り 宗義

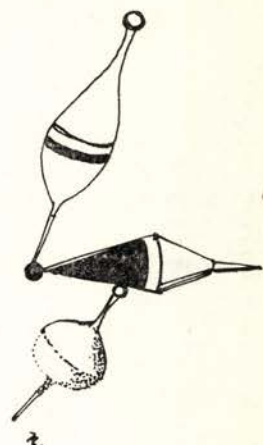
ナイターを寄席に変えさす ミリバル

ナイターになってイヤホー

義談口窓

面会

麻生路郎



谷崎潤一郎作「台所太平記」が映画化されたので、アベノのセントラルで観た。一種のモデル小説で、物語は戦前、戦中、戦後に、作家の千倉家につとめたお手伝いさんの生誕を明るくえがいたもので、近ごろ愉快に観たものの唯一のものだった。しかし私はここで映画批評を書くというのではない。森繁久弥が扮した作家千倉氏―作家谷崎氏自身と見てもいい―のところへ、千倉氏のファンであると呼ぶ青年が大部の原稿を抱えて面会を求めた。文閲で、この青年に会ったのが、無口で、ぶあいそうなお手伝いさんの一人だった。そのお手伝いさんは、主人は紹介状がなければ、どなたにも、お会いになりませんといったきりだった。そこへ千倉氏が一寸

しかし私は、この際の千倉氏のとった態度を少しも、非人情だとは思わない。
有名作家が、紹介状のない人に会わないということは、むしろ当然のことだといえよう。一々会って、先方のいい分を聞くだけでも、自分の時間を丸つきり他人に奪われることになるからだ。
昔、谷本富という文学博士が面白いことを訪問記者にいったことがある。
君は僕を訪問して、喋べらせて、それを記事に書いて、それで飯にありつけるが、僕は喋べりたくもないことを喋べらされる。それは一つの労働であるが、何んの報酬も与えられない。君は僕を世の中へ宣伝してやっているといかにも知れぬが、僕は喋べりたくないことを喋べって、僕自身を世間の人に知ってもらうつもりはない。
僕は喋べることと、書くことによって生活をしている。たとえ三十分でも喋べらざれば報酬を要求したい。だから君は、そのことを承知の上で、喋べらせるなり、書かせるなりしてもらいたい。どっちにするかネといったって、博士は口をつぐんだというのである。大

か、ナイターの灯が消えたから帰るだけでは浅い。そこから想をねってほしいと思う。

誘蛾燈にひかれる虫のように野球場へ向うファンの姿を見ているのだが、少し酷だと思われるようである。『好カードナイター』の灯に誘われて、とでもすると少しは内容があると思う。

ナイターで見合いとは計られた
みさ子

くすぐったい感じのする句である。何か真実味といったものを感じて好意がもてる。

団交がナイターとなる持久戦
弘朗

下五文字の持久戦が弱いと思う。これをもっと深くすると中々佳句になる筈である。

ナイターはいいな日焼けせずとみえ
雄水

良いところをつかんでおられる。結語のみえは見れとする方がよいと思う。そして日焼けもともを入れ、せずとのとをともにするとなだらかになる。『日焼けもせずに見れ』である。

ナイターのフライは暗に吸いこまれ
杏花

一しゅん見えなくなっただけのことであろう。暗にすい込まれたと作者が感じたのだからこれでも

いいと思う。この句はテレビで見たいナイターの句であらう。

ナイターの空いた外野で蚊にくわれ
白柳

次回研究題「客」
メ切 七月二十日
句数 五句以内

宛先 大阪府南河内郡美原町丹上四〇四
清水白柳

現代柳人録

- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
(四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話
(九) 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無
(一二) 川柳に手を染めた年月
- (189) 佐野 白水
さの みづはる (二) 白水 (三) 白くすい
(四) 大阪市阿倍野区三丁目二の二三 (五) 大正二年二月十三日
(六) 大阪市南区瓦屋町一番丁六六 (七) 会社員 (八) 大阪 (六二二) 一一六九 (九) 酒豪もう若い二合の酒に寝る (一〇) マージャン、園芸 (一一) 有 (一二) 昭和十四年七月
- (190) 小川 静観堂
おがわ せいがんどう
小川昌男 (二) 静観堂 (三)

正初期の話であるから谷本博士でなければいぬ言葉である。

ここまで割り切ることは至難にしても、講演や執筆で生活している人なら、誰でもそう考えるに違いない。

小説を書く人たちが、あつちの宿、こつちのホテルを逃げ廻って、執筆していることを、よく聞かされるであらうが、自分の家がありながら、自分の家で執筆出来ない人たちは何んという因果な商売だと、むしろ同情してもいいと思うが、どうであらう。

右の青年は一方的であつて、千倉氏の生活については、こればかりしも考えてはいないので、紹介状がなければ会ってもらえないという社会常識すら持ち合わないものである。日多忙な大人の世界では誰にあおと、会わずにおこうと自由であるが、会うにしても紹介状という門限をつくっておくのだ。

川柳の世界では、千倉氏のような作家生活とは違って、突然訪ねて来られても、紹介状がなければ会わぬというようなことは、まあ、まあない。それに殆んど川柳作家はプロでなく、同好の趣味人だから、雑誌で、名前だけでも

知っていれば初対面から十年の知己のように語り合うものだ。それで以前はよく詐欺にもあったが、近ごろは、そんなことを耳にもしなくなった。

私のうちでも、時々見も知れぬ

人がやって来る。私が執筆で手が放せない時には、林女史が玄関で、ほどよくお相手をしてくれる。Sクシの場合は、はじめてやって来られた時には、僕の机のハタで会った。相当の年配者で、耳が遠いとは知らなかったので、ツシボケンをつつのには、閉口した。田舎のお祭りの餅と、自分の作った句を持って来て話しこんだ。百姓のご隠居さんで、ヒマが一日でもあるので、これにも閉口した。二度目からは林女史に任かすことにした。作句上の問題をくどくどと質問をされるのを林女史が根気よく話して聞かすので、林先生、林先生とよくやって来た。

あの頃、和歌の盗作問題がやかましいころだったが、このSクシの作品の中にはちよいちよい盗作がある。それも諷刺の句などが次ぎ次ぎにあらわれるのは弱った。別に悪いとは思っておらぬらしいのだ。題にうまくはまってい

ばいいと思っていられるらしい。面倒を見ることをこつたたらどうだといったが、うちでこつたれば、他の社へ行くでしようし、他社でうまく面倒を見てくれればいいが、せつかく楽しんでやっていられるのを、突き放す訳にもいきませんから、盗作をしてはいけないことを、かなりあからさまに説明して、とうとう盗作しないところまで漕ぎつけ、その後相当いい句を作るようになり、句会へも楽しんで出席するようになったのでヤレヤレと思っていたら、突然その訃を聞いた。つきあっているうちに、実に好人物であることを知ったので、もう少し生きて余生を楽しませなかったかと思う。画家の中村不折さんは玄関に、午前中は執筆につき面会ご用捨下され度と書いておられた。国木田独歩の友人の斎藤花さんは新聞社の玄関に、自宅の面会日を書いて貼っていられたが、面会日におられたためしはなかったと聞いている。なかなか面白い人だった。知らぬ人との面会は人によって、いろいろの場合があるであらう。

とにかく、自分の時間、他人の時間をうまく生かすことは容易でないと思う。

(四) 兵庫県伊丹市北村字野畑二五六(五) 明治21年8月19日
(六) 東京市麹町区下二番丁(七) 医師(八) 伊丹・二三九五(九) いっそきろるかシャツのぶらぶら釦(一〇) 雑文、観劇(一一) 有(一二) 昭和十三年

(191) 野村 岬 月

(一) 野村新吉(二) 岬月(三) (四) 島根県出雲市若葉町(五) 昭和3年8月26日(六) 島根県出雲市今市上町(七) 郵政省職員(八) 出雲・九六四(九) 古傷にふれて茶碗は冷えたまゝ(一〇) 活花・謡曲(一一) 有(一二) 昭和二十三年一月

(192) 石居 高 志

(一) 石居孝男(二) 高志(三) (四) 東京都小平市美園町二八三(五) 大正14年8月11日(六) 東京都北区滝ノ川西ヶ原八(七) 会社員(八) (九) 受話器を押えて「留守だといましょか」(一〇) (一一) 有(一二) 昭和二十三年暮

(193) 常岡 孝 風

(一) 常岡孝夫(二) 孝風(三) 丹波の守(四) 兵庫県水上郡柏原町本町二〇六(五) 昭和8年10月19日(六) 大阪市此花区伝法町北

五ノ一(七) 指物業(八) 丹波柏原四七五の乙(九) 残酷は金の一言に盡きてか死(一〇) 将棋(一一) 無(一二) 昭和三十年十一月四日

(194) 山内 静 水

(一) 山内俊見(二) 静水(三) (四) 広島県竹原市竹原町田中(五) 大正5年3月10日(六) 現住所(七) 国鉄職員(八) 竹原・五七七(九) 盲目の杖直角に向を変え(一〇) 彫刻、吟詠(一一) 有(一二) 昭和三十年五月



コクヨ
便箋





麻生路郎選
北川春巢選

若者がおらず御神輿飾るだけ 今治市 越智 一水

お隣が売ってうちの田値が上り 同

温泉を出ればこどもやてる 同

投票も朝湯がてらといいい身分 同

夜学生いたわるような月明り 同

窓窓開けて縁へふむミシン 同

知らぬ間に幹事であつたクラス会 竹原市 杉原 愛鳩

次々とB G花散る如くやめ 同

つきあいの立小便へおぼろ月 同

真実の愛というのに金が要り 同

わかつているけど株屋の口にのり 同

初孫の重さ苦にせぬ山開き 同

諦めをゆさぶる香りバラの真紅 西宮市 末沢 花美

病み伸びた髪が流行の形にあい 同

女史の貌捨ててルージュを選んで 同

美顔術苦勞に遠い顔で受け 同

美しい自信カメラへためらわず 同

横になるだけがレジャーの主婦であり 枚方市 宮川 珠笑

勇退を迎えるポスト新設し 同

酒ビンをかつぎ花見のポーズする 同

湯気のたつような煩して児がも 同

書籍部で特売場の妻を待ち 同

すし詰めもタクシーならば満足し 京都府 都倉 求女

水銀灯これから夏という灯り 同

夕映えがビルの白亜へ集中し 同

ウソ大会やつてるよにコマージュ 同

煩打って愛の強さを見きわめる 兵庫県 常岡 孝風

白衣の天使また薄給を口にす 同

夕焼けが重く不況の漁夫のしわ 同

ゴギブリの精力疲れた目でながめ 同



落書帖提唱

今 西 生 薑

落書というのは欲求不満を解放したという人間の本能に近い行為かも知れない。

仮りに本能としても国宝や重要文化財の神社仏閣等の落書はつづしみたいものである。こんな落書をしたという方は落書喫茶もあるのだからそこへも行つて思う存分書きなぐれば良いだろう。とはいふものの落書も悪い面ばかりではない。先日見る機会はなかったがどこかで落書の展覧会があった。

又古寺解体修理等でたまたま落書が見付かり、時代考証に重要な役割をするような功德もある。神社仏閣特に古寺の多い京都奈良ではこの落書になやんでいるようであるが、殆んど本能というべき落書にこれという対策をもたないようである。結局前述のような落書喫茶に似た落書の場を作るより方法はないだろう。落書にも先に述べたような時代相の面白い文獻にもなる性質を持っている。私は朱印書式の長くのはせる帖を作り、一頁いくらかに落書氏を奉納させ、わいせつなものを除き、川柳俳句、和歌、詩短文、画、漫画、



赤札の數ライバルを待つ個展	京都府	小黑 王石	本願寺或る日「がんす」の群でうめ	同
失業保険花嫁さまが取りに来る	同	同	別の渠があるのか土曜は途中下車	同
先生はよく噛めママはせかす膳	同	同	噂どおり離婚のメッセーシイ夫婦	伊丹市 小川静観堂
人間のみにくさそれを演技賞	同	同	テレビの相撲俺も一緒によりき	同
肩書がふえたら薄情さもふえる	出雲市 森山健太郎	同	花の便りしたのに散ってからも来ず	同
アンテナを闇借りの方が高く立て	同	同	シヨウウィンドのロー細工料理を汚し見る	鳥取県 鈴木村諷子
恋醒めてからは貯金もやめにする	同	同	エピソードまだこの村に生き残り	同
ガムを噛みながら事務執る ^お 杜風	同	同	入学式に不文校則きかされる	同
銀婚を周遊券でねぎらわれ	竹京市 山内 静水	同	食うて寝て美容体操して嘆き	仙台市 平野 光道
ふりがなを付けてもら ^て 読む祝詞	同	同	友の肩たたいて小さな優越感	同
逆境へ一人も欠けず子は育ち	同	同	テレビアンテナ高く猛犬飼っている	同
石庭を生で眺める峠茶屋	京都府 大久保和三郎	同	妻の手に俺の分まで皺が寄り	バロアルト 斎藤 流路
巻煙草片手拌みで猪口を受け	同	同	日本へ土産は金にしろという	同
嘘のない男癪癪持ち合わせ	同	同	貧弱な胸だが恋とやらを知り	同
親御さんもいるのに自殺説曲げず	青森市 水谷 谷水	同	修繕のきかぬ呼吸が夜へ余り	静岡市 多々良英舟
見送りは左遷のほうが多かった	同	同	呼吸するさえゼニのかかる身の	同
停年の余生を云い値で使われて	同	同	ビールでもかうほかはなき冷蔵庫	同
桐の花斜陽の屋根へひっかかり	竹京市 大洲大八洲	同	一日をむつきと過した妻の留守	岡山県 永宗 宗義

等落書させ、これを寺社で保存する方法を取れば、建物等の落書は少しは減るだろうと思う。寺社も纏まったものは年一二回曝書の機会に一般に展示すれば面白からうと思う。朱印帖式といったのは、展覧の便を考えたからである。「川柳雑誌」の誌面をかつてこの様な提唱をしたのは、川柳が前述の詩の内一番批判的な性格をもっており、もしこのような落書帖が後世に遺されれば、時代相をうかがうには一番適当な詩であると思うからである。

どこか奈良京都というような古寺の多い処でどこか先鞭を切る処はないものだろうか。

坐りのよい 句を作ろう

直原 七面山

どこの柳誌を開いてみても、ツルやサギのようは一本足で立って

車
福壽司

心斎橋筋大丸前

電話(271)三三四四番



花火見るところか迷子にして帰り	同	農繁へ昨日の嫁が鎌をとり	同
美人には如かずニコヨンして居ても	同	いま売れた場所へ売りも品を置き	鈴鹿市 吉田 俊和
商敵の下取りソロバン弾いてみ	尼崎市 大垣たもつ	そろばんも儲けをはじく音が好き	同
銀行の集金笑顔で迎えられ	同	梅干が旨い新茶を妻と飲み	宮崎市 野口卯之助
何処やろと赤い自動車見送られ	同	腕力とあれば兄弟子には負けず	同
折り畳むように老婆は座り込み	金沢市 根上 杏花	スタートの合図が待た	河童の子 市 睦 瀬川 萩路
太陽よ見て呉れおれの力こぶ	同	郷愁をそそるノレンのつばめの絵	同
綴方母は冷汗かいて読み	同	つばめさえ巢立った家に帰るのに	市 睦 上田 紅溪
花すんで又血圧の医者通い	大阪市 福富 隆子	邪魔をする孫もやっぱり手伝う気	同
靴下の線もずれてる花の山	同	靴磨き客の切れ目にコンパクト	奈良県 木村よしを
交際費かさむ桜も散りはじめ	同	すんなりと足投げ出して日が長し	同
九官鳥貴方の歌を歌えかし	神戸市 大野木真砂	定年へ菊に打ち込む庭があり	大阪市 藤富 淀月
スラムの雀よく肥りよくよごれ	同	ええとこの子も鉄管が遊び場所	同
風薫る五月借金などすまい	鳥取市 近藤 昭夫	ツーとカースタンドの酔い心地	高知市 須藤 俊江
経験があつて男を信用せず	同	簿記追試単車四輪すぐ通り	同
新緑へ鶏も散歩がしたくなり	愛媛県 村上 石峰	現金も幹部止りで票は来ず	香川県 三井 酔夢
新緑へ小鳥も水も木もうかれ	同	春愁を泥酔の群かき乱し	同
過去は過去今日純白のドレス着る	玉島市 井上 旭峯	サヨナラになつてい	ちた事をいい 西宮市 鶴飼 鮎子

いて、実に危っかしい感じの句や、棹に干された洗濯物のように、風が吹けばどちらへでも、ヒラヒラ揺れ動くような見るからに不安定な感じのする句が誠に多いことにお気付きになられることと存じます。

でこれらの句は、決して読者の深い共感を得たり、読者に強烈な感動を与えるものではありません。

ところが、たまには、あの奈良の大仏様のように、相当きつい台風に襲われても、ビクともしそうにないデンと鷹揚に構えていて、落付きはらい、まことに坐りの良い感じのする句があります。

この落付きはらった句こそ、私は「いのちある句」であり、柳史に残る名作ではないかと思うのであります。

恐らく、不朽の名句といわれるような句は、これら坐りのよい作品の中に存在しているに違ひありません。

だが、この坐りの良い句を生むことは、これは誠に至難な業だと思ひます。

人生というものとガツチリ四つに取り組んで、これに完全に打ち勝つて初めて創り出すことが出来るのではないかと考えられます。

道はただ一つ、修業あるのみであります。だからといって、こゝで申し上げる修業は、大工や左官のお弟子さん達が、親方さんにつ



重大な問題まずは食べてから	同	死金を使うなと親仁やかましい	同
二浪目に春雨すこし冷めたすぎ	川崎市 赤池 五郎	金の要る事はくさしておく食乏	見島市 伊丹柳瓢子
ヤミ米の方が安いと云う政治	同	晩酌はかかさず薬忘れ勝ち	同
草取りの農婦にマイク都市整備	笠岡市 谷本鈍愚坊	金送れとは親馬鹿をたのしませ	玉島市 水粉 千翁
議長への順が来たのに落選し	同	ひと騒ぎしただけ花は無表情	同
訪日へ若いづばめもつれて行き	布 畦 朝岡千代菜	平凡なゴロで終った吾が半生	羽曳野市 古川 静波
邪魔物にされてと義母は寺詣り	同	錠剤をキャッチャーライの如く服む	同
命令一下おやじは何時も皿洗い	布 畦 森田 紅茶	スタートは皆勝ちそうな顔ばかり	布 畦 由上 細香
弟と云う事にして宿り込み	同	浴衣着りゃ二世も楚々として歩み	同
すき間風がポスターが耐を召し	金沢市 山本 木象	民主主義やつぱり虎の威を借りる	布 畦 藤浦 美潮
交代に月賦背負うて共稼ぎ	同	踊り見に来て浴衣だけほめて去に	同
お転婆にホームシックがあるといふ	笠岡市 松本 忠三	点景になって無心に糸を垂れ	大阪市 山田 蛙水
濁ってる空気を吸いに上京し	同	指の骨鳴らしパチンコ台へ立ち	同
棚の藤よそへチヨツカイ出さず咲き	芦屋市 里田一十	青空に元気なボクの鯉のぼり	堺市 大谷 樽雄
水中翼船水上スキーアメンボー	同	兄嫁が息抜きにきて泣いて去に	同
白玉も提げて花見の女連れ	新居浜市 安藤 桂仙	ごひいきへ隅までずいと願ひ上げ	出雲市 中川 晃男
花薙 三味線かばう俄雨	同	子を持たぬ空虚へ花が散り急ぎ	同
小商い妻の商才に牛耳られ	津市 嶋野ひ呂し	姉さんはいつも寝ている里帰り	七尾市 松高 秀峰

いてその技能を習い覚えるような修業ではありません。

これはあくまでも、人間そのものの修業であり、人間形成上の問題であります。

従ってこの修業には、金もあれば時間もかかり、その上精神的な幾多の苦悩、時には苦痛も伴うものであります。

勢い私達は、自己の持つ全てのエネルギーを重点的にこの方面に注がなくてはなりません。

で、こう考えて参りますと川柳作句上の技術などは、いわば末の末のことです。

口はばったい云いようかもしれませんが、普通の常識さえ備えておれば、川柳作句技術の奥義などは、そうです石の上にも三年で、千日もすれば自ずと体得し、極めることが出来るものであります。

味の川柳

モダン 川柳

心 齊橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL(271)6684

御集会には随上御利用下さい





社長以下新生喫ってよく稼ぎ

同

鉄兜さながら猿電工夫 茨木市

高木繁太郎

里帰りバイクで送る世の変わり 石川県

南 伝一

ビールの泡を見つめる下戸の口 松江市

岡崎 祥月

多数決とかで甘党去に支度 島根県

松本 昌

金が無いのか感情か反対派 大阪市

西本 保夫

やまい消ゆ恋しき人の初見舞 八尾市

大北 利明

嬉しさで飲めば番茶も別な味 大阪市

半田 夏生

邪魔された話もし合う輪となり 布 庄

秋田布鼓庵

今の世は寺に育った身にけわし 京都府

西村句楽坊

浴衣をば着せ踊る所作を見せ 布 庄

藤本 抑一

鉄筋の家もゆるげと呱呱の声 兵庫県

斎藤たけお

ほめられた牛真つ先きに肉にされ 福島県

住吉 貞坊

着流しで来たのを悔む門構 新潟県

小林 孝正

泣かはる泣かはる涙も武器 京都府

山川 勝子

飲んで寝て降りずに戻る観光バス 神戸市

吉田 隆史

シヨートパンツ向いへかきまぶる見せ 河内長野市

森本黒天子

ブライドも押し潰される満員車 大阪市

山崎佳津子

テーブルマナーが心が疲れて来 八戸市

状守 和穂

バスガイド声なく長い並木道 大阪市

武居寿美司

雪解けて山中情緒生きてくる 石川県

大山 雅城

月夜少女詩心とほしく髪を梳く 大阪市

北極ひとし

初ナイター寒さしのぎにやじつ 大阪府

石田 新石

負けん気は置くと無い自家用車 金沢市

河合 卯翁

百姓のストせめて一等米を食い 岡山県

鳥取 周甫

へそまげてデイト断り後悔し 布 庄

秋田美津子

世の中が道境の子ときめてくれ 今治市

八塚三五島

いつかまた逢えるわねといったま 西宮市

栗原 光子

帆走へ世界一なる夢をのせ 布 庄

林 蒼蛇楼

母の日もそこちらかす子ばかり居 大阪市

北中 ふじ

口あいておれに呉れよと子の燕 羽咋市

三宅 ろ亭

臍繰りに物を云わせる倦怠期 布 庄

寺山沈丁花

井戸端の会議蛙がきいている 松江市

岡崎 雪美

一張羅着を蝶だから狙われる 笠岡市

佐内 隆文

水平線白い帆だけがまだ見えて 布 庄

谷口恵津子

さて、作家のものにした作品の良し悪しは、実は作家自身の体内に保持している人間性、人格、人物理諸要素そのものの放出する格調、即ちその人らしい句いの調べが、濃度が、その創り出された句の中に、如何に多量に、如何に如実に注入され表現されているかによって決定されるものだと思います。

従って、もしAの句よりBの句がより秀れているとすれば、それは疑うべくもなく、Bの句を作った人の方が、Aの句を作った人よりも秀れていて、より高度な人間世界に住み、より崇高な芸術性を持つてる人物であるといっても過言ではないと存じます。

なぜなら、「句はその人自身であり」「句はその人の化身である」「からであります。

名句は名器（人物）によってのみ生み出すことが出来るのである。

作家に悩みがあれば「句」にも悩みがあり、あせりがあれば「句」もあせりが見えることは、これはもう充分皆さんも体験熟知されているところであります。

どうか皆さんも、この辺の事情を良くご理解下さって、専ら坐りのよい句を作るために、より一層高度な人間形成への大悲願、否大理想に向って、格段のご精進を賜りますよう、柳友の一人として切望して止みません。



風呂で会った人

— 特集 —

風呂は社会の縮図だといわれている。そこで柳人はどんな人に会ったか。これがその答である。



異邦人的 銭湯観

早川清生

山と杉が美しく、百人中九十七人までが貧しい山陰の山奥から彼が押し出されるようにして大阪駅へついたとき、街のビル群はまず内容より形式において巨大な怪物であった。ふと見上げた阪急百貨店の建物が今にも崩れ落ちそうで、思わず頭を手でおおった。そんな都会は不思議の国より不思議で、その夜つれて行かれた銭湯は金殿玉楼そのものであった。風呂とは彼にとって月と光と十ワットの明りが隙間から流れこむ狭い隠微な世界で、詩と思索と休息とがそこにあった。従って煌々たる電光下には紳士も淑女もいっせいに全裸となる光景はすさまじくもまた異様で、彼も同様の状態になりながら全身の汗腺が一度に開くのを感じた。なんべんも滑りそうになってたどりついた浴槽の中で、彼はやせ犬のコンプレックスを覚えながら、必死にいっぺんこの中で小便をしてやろうと思った。

恥恥しい上り湯の先ゆずる

終戦直後、進駐してきたタイムだったかの記者は三助くんがチョコレートかなにかをやって女湯を写させ誌面を飾ったが、この写真が好色や好奇心からでなく批判精神の所産だったとすれば、男湯の方がより適切であつただろう。都会の生活に次第に馴らされて彼は衛生と能率と合理主義とが重視される銭湯が故郷の風呂と異質のものであること、また入浴にもおのずから方式があつて個性はその枠の中でのみ発揮されることを知った。出郷の前に彼は気宇壮大な夢をなんべんか描いたが、互いにはだかを見せ合い同じ湯を使い合つて他人という銭湯の存在はまったく想像の外であった。正月にはその中でながながと質問が交わされた。

脚伸ばす場所出稼ぎへ湯がよこれ

街での生活は彼の大きな理想とわずかな通帳とをむざんにしぼませてしまったが、いつか銭湯にローマの貴族たちのような満足感と安らぎを見つける術を覚え青春の無聊は風呂へ連れだつて
体重やその他のものの大小に敏感に卑小感を抱き
幼女漬す出稼ぎの眼が風呂の隅

そんなことに都会人への報復感を味わった。彼は今でもいっぺん小便をしてやろうと思っている。

わたしは考える

酒田清子

「あなたでも女湯へ入るんやろなア」と悪友の一人がからこうが、子供達がお母ちゃん、おふろと呼んで呉れる以上は真正正銘の女性である。いくら男性的だといわれても、男湯へ入るわけには行かない。銭湯では女湯という安心感がそうさせるのか。

混合へタオル一本たよりにし (一米)

こんな殊勝な姿は余り見かけない。中にはお相撲さんの土俵入りそのままに堂々と入ってくる人もある。私はお湯の中で子供の動きを見るのが楽しみの一つで、よく相手になり過ぎて、のぼせることもある。この間も三才位の女の子がお母さんに質問している。
「お母ちゃんこのマリどうして浮くの」
「空気が入っているからよ」
お母さんは少々得意気である。
「お母ちゃん空気が入って円々るいの」

私はお母さんの答を待ったがお母さんは笑いながら子供を横抱きに慌てて出て行かれた。私は寝床に入ってから何か物足りぬもの

が頭にこびりついたままである。私だったら、あの時何と答えたろうか。又どんな答えをしてやったら納得しただろうか。こんな簡単な問題で頭を悩ましている中に眠ってしまったらしい。適当な答えも考えつかぬままに。

漫才師の

街の風呂

今西生薑

親父の代は牧場だったので、冬期牛乳の需要が減った時は、今のように脱脂乳が売れないのでクリームを取った後の牛乳でよく風呂を立てて呉れたものである。浴後感なんともいえず爽やかなものだが、今なら一人千円以上かかるだろう。

牛乳風呂の効き目も説けぬ顔の皺

飛田遊廓ができ牧場を止め、借家を立てたので銭湯に行くようになった。最近減ったが、薬湯で首を振ってる浪花節

私の入浴時間はまちまちだが、女湯は子供を連れて来るせいはいつも仲々賑やかである。よくのほせぬものと思う。

のんびりとする風呂へ来て子を叱り

それだけならまだしも一抱えもある洗濯物を持ち込み洗濯をする

心臓もあるようだ。

三助が横目で洗濯物をにらみ

見て見ぬ振りをするのも商売のつらさ、だが最近湯槽に循環濾過装置がついたので、以前のように垢が湯槽の隅にたまらぬようになったのは結構な事である。

内股でチヨコチヨコおかまか、り湯し

最近男娼の数もへり、女湯へは流石に這入りはせぬが、お姉ちゃんと呼ばねば御機嫌が悪い。山王町という場所柄刺青も断然多く、最近チンピラ迄まねるようになった。

入墨も麻薬で呆けた青い肌、こんな万華鏡のような銭湯で、混浴でもないのに夫婦で来て帰るも一緒という仲の良い夫婦もあるから妙である。天王寺村当時九里丸は山王町に住み、多くの万才師、浪曲師を誘い住ませ、現在も万才師の町といわれる原因を作ったのも、風呂は夜通し鯛は一尾でも買え交通の便も良いといったからといわれている。話をしながら暖くもってフトはだか随筆のボードンの項を思い出し気を付けて見ると、いたいた。石鹸で泡だらけのボードンを展げのびしながら、いと真面目な、しかし陶酔しながらゆっくり洗っているのを見た。全く男後生業、自分も先刻そうだったと思ひ出し苦笑しながら、のぼせそうになったので湯から飛出

した。呵呆！ の声を背で受けながら……

柄杓を持って

来る奇人

金井 文秋

十銭あれば風呂へ行つて、婦人に喫茶店でコーヒを飲んで、まだ釣銭があった四十年くらい前の事、当時南区の高津四番町に住んでいたが、近所に奇人が一人いた。

商売は駕屋（今の葬儀屋）だが、若い時には随分極道をしたらしく、女郎を嫁はんにしていた。しかしじだらくな面は少しもなく、俗人にはとても真似の出来ないような、きつちりとしたところがあったことは、近所でも知らない人が多かった。

とても深癖で子供が嫌いだったから、子供が生まれないように、女郎を嫁に貰ったのだという事を大分あとで聞いた。こんなところからして大分変っているが、性格は子供のような無邪気なところがあり、子供っぽいいたずらをして歩いて、町内中に知られていた。

たまたま町内を歩いて、知らない顔を見ると、転居して来て間がないと早速いたずら気を起こし、すました顔で自分の家の行先を聞き、後で腹を抱えて笑っているというふうである。

或る日の事、風呂へ行く姿を見て驚いた。打水に使う柄杓を一味

わり大きくしたもの、小型のお盆位のボール紙に字の書いたものを持ってのど。『おっさんそれなんに使うのん』と聞くと、さも得意そうに教えてくれた。柄杓の方は頭を洗った時に、水道の口まで伸ばしてぬるま湯を扱んで頭へかけるのだ。「ヘーエンそれでは凡い紙に字の書いた方は」これか、これは金、金の棒包む風呂敷これにありと書いてあるので、これを着物の箱へ掛けておくと、着物をさがす必要がない。金の棒は罌の棒だよ。

着物の入れ場所ぐらい紐を持っていたら、結果的には先輩にゆする美徳めいた形となつて、ただ一人湯にひたつていた。古利の背の冷々する廊下を行く人々の足音や、部屋戸を開けたてする音などを耳にしながら、迷想に耽っていた時である。

ガラス戸が開いた。誰か風呂入りに来たなと思つて矢先、「にいさん、お加減はどうだす」思いもよらぬ女の声に反射的に（？）振向くと、つい後ろにまさしく全裸で、はや風呂桶を手にしている。くるり背をむけて、もとの姿勢にかえつたものの、好奇心など微塵もなかったのは確かだが、どうして振向いたのかさっぱり判らない。

「成るようになれと無理矢理落ちついて」男一匹慌てちゃならぬ。悠悠と

る。

山の

風呂場で

米沢 曉明

ここは海拔七百メートルの山頂、弘法大師縁起〇〇寺の風呂である。稍古びた広い風呂場で径四尺もある釜風呂が二つ、今日は平日で参詣人が少いから一つは公休といった処だ。

弱輩というエチケットを弁えた訳ではなくスローモーを自負する私だから、結果的には先輩にゆする美徳めいた形となつて、ただ一人湯にひたつていた。古利の背の冷々する廊下を行く人々の足音や、部屋戸を開けたてする音などを耳にしながら、迷想に耽っていた時である。

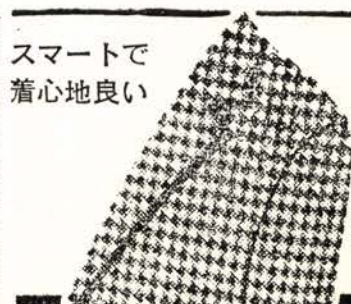
ガラス戸が開いた。誰か風呂入りに来たなと思つて矢先、「にいさん、お加減はどうだす」思いもよらぬ女の声に反射的に（？）振向くと、つい後ろにまさしく全裸で、はや風呂桶を手にしている。くるり背をむけて、もとの姿勢にかえつたものの、好奇心など微塵もなかったのは確かだが、どうして振向いたのかさっぱり判らない。

「成るようになれと無理矢理落ちついて」男一匹慌てちゃならぬ。悠悠と

スマートで
着心地良い

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り



湯にひたつていると、一回二回湯を使つていたその女は堂々と而も平然と湯につかつて来た。こちら身を堅くする程ではなかったから二三言葉を交わした。それは戸籍調べのようなもので何の変哲もない。向うさんへ安心感を抱かせたと思う間を辛抱して私は風呂を出た。

翌朝早く、胡摩堂の勤行が始つたので、連れと一しよに堂の片隅に正坐して読経に掌を合わした。昨夜の女も亦神妙に信者らしく振舞っていた。
「昨夜はどうも……」。
お互いに、どちらにも敬虔な態度

詠 近 舟 同



寡婦若くして地下足袋をはく美談
赤旗にワンマン社長ゆすぶられ

須坂市 高峰 柳 児

拭かんでもよい眼鏡ふきつつ小言
一代でよい癖係にまで及び

今治市 長野 文庫

品切れになるよと近所まで誘い
はち切れる若さ課長の眼にとまり
酔う程に女も足を横に出し

水車小屋南面のような翁いる
鯉幟子供は消化不良です

大洲市 米沢 曉明

生きている証拠に鰻の目が動き

こっそりと秘書から借りる人名簿

どっときて別々のものメニュー表

人間国宝継ぐ人のなき世を嘆き

和歌山市 秋 月 宏方

水の国蛙は山をまだ知らず

感無量故郷へ帰る一等車

亡夫にも負けない意志で子を育て

今治市 月 原 宵明

BGの十九に勝てぬ支店長

免許証とれないままに嫁てしま

逆境になって仙人掌好きになり

で言葉交わし霊気みなぎる清浄な山で別れた。この女性いまはいずくに……。

清らかな今は昔の夢たのし

浴槽の先客

国弘半休

風呂で会った話はお風呂でない、しないことにしていたが、折角の機会であるので最も記憶に新しいものを一ツ二ツご紹介しよう。

人生の垢を落しに来た湯舟ふとした在職中の因縁で温泉町の近くにある旅館の管理を頼まれた私はその後比較的客户の少ないこの温泉の朝風呂を好むように

なり、ここで国鉄三十六年の疲れと汚れを直し第二の人生へとスタートを切った。

ところがこの浴槽に何時も先客が一人あって私が這入ろうとすると一寸、ほんの一寸会釈をして又身体を湯深く沈めて、私の湯が終るまでじっとして動かない人品卑しからぬ老人がいた。初対面のときは別に気にもとめなかったが、二、三度こんな風にされると「貴殿はどなた様で？」位聞きたくなる。

五回目に顔が会った或る日の朝、私も御多聞に洩れず、開口一番お訊ねに及んだのであるが併し私の第一声は不発弾同然何の手ごたえもなかった。続いて第二声を発した、相手は「ハイ」と答え

て静かである。これでは話にならないので半ばあきらめていたところ「三社詣りは朝が早かった」とか「博多での時間が長い」とか私に話しかけられる。そこで私は「団体のお客さんだったな」と思ったので「心得ました来年は乾度お気に召すプランを立て御案内しましょう」と答えたのであるが、その返事が何んと奮っているではありませんか、「三年もたつとどうなるかわりませんよ」とどうもこの会話は話の間に合わないの

で、この朝はそのまま会釈をして帰ったのであるがその後、この老人が聴音器を耳にして、すぐその「たばこ屋」の売り場に、坐っているのを見たのである。

この会話を認識不足は私の方で、完全に私の方の黒星であつた。

た。露天風呂手間のかゝらぬ子が騒ぎ

清流の砕けて天ヶ瀬々を早やめ

水郷日田からバスで四十分余り溪谷に沿って上ると椎茸の美味しい天ヶ瀬温泉につく。

天ヶ瀬の湯はこの溪谷に沿って湧出し、川原の岩を穿って露天風呂をなしている。

旅館は橋を中心に兩岸十数戸、岩で作った岩くつ風呂、木を配したジャングル風呂等を設け、この地を訪れる者の旅情を慰めている。

初夏の或る日私は婦人団体一五〇名を引率してこの地を訪れた。

た。道中悪路に揺られた団体客はバスが停まると一先ず部屋に案内され旅装をといて風呂へ這入るのである。

お女中さんが案内して来たと思われる女湯の方が間もなく騒がしくなってきた。私は誰にも気兼ねすることなく男湯にじっと沈んでこの状況を聞いていたのであるがふと私の鼻の先に会長の裸身が現われたではないか「女湯の奥を探れば男湯につづき」私はこのとき次から次からと押しかけて来た婦人たちに男湯の場を襲げきされたのであった。

併しそこはお互いに知り合った間柄と先輩で会長も私も笑い合いい、語り合って、湯をはめて帰ったのである。

評句

レー



大 阪 市
大 洲 市
唐 津 市
清 森 集

後 藤 梅 志
米 沢 曉 明
新 岡 回 天 子
木 村 涼 人

店の壺どれも貧しき町うつる 清 生

梅志君壺といえば最近ではもうだんだん用途が狭められ、一部の美術品ぐらいい限られめつたに店頭などでは見掛けないように思うが、この句のように、いくつもの古い壺や古道具のいるが店飾りになっている、飛弾の高山市（裏町）のような所もある。その奥深いところにならべてある品物に、貧しい町が映るかどうか疑問だが、この句にはフィクションに富んだ清生さんらしい技巧がひそんでいて、一見佳句の感じを与えているが、見る人により色々感じがちがう様にも思われるからまず皆さんのご意見がききたい。

晓明君失礼して私なりに。壺屋であろう。どれも、店ので、それがわかる。普通商品であろうと、

芸術品であろうと私は詮索しない。その壺々へ貧しい町がうつる。それは、さびれゆく町、疲弊

していく地方の一コマを壺に感じるところに、一つの見つけ所を覚える。人はいうであろう。壺でなくともよいと。然し、鍋や釜、鏡

や硝子戸よりも矢張り壺というところに、私の解釈からは矢張り壺でなくては、句境が湧かない。

回天子君この句は、句の生まれ土地の感じだけだ。壺に当たったかが貧しいというの、その人が感じたことで、唐津あたりでは差当り、それは全く反対の現象を生むであろう。何故なら唐津焼の産地で、どの壺に当る陽も赫々として壺を売り出しているのだから。

凉人君壺と貧しき町……実感かも知れないがなんだか少し取って

つけたような気がしないでもない。梅志さんのいうように貧しい町が映るか映らないか知らないが、折角の句材が説明に終つてるように思われる。

私がこの句材を詠むのであれば「壺の店貧しき町の貌があり」位いにして「どれも」とか「うつる」とか主観に少し余韻を持たせたいと思う。

梅志君凉人さんの仰っしゃることも一応うなずける。たしかにこの句は説明的だが、それは「店の壺どれも……」としたあたりののんじて「……貧しき町うつる」は文語調に変化し、清生さんらしい慎重さが窺われる。本来ならこの後半ですっきりした感じに誘い込まれる訳だが、この句の場合は少しこの辺の感じが稀薄でやや散漫な感銘におわるようだ。

晓明君句も若い、作者も若いのである。中七もよく生きて、それをバラ代に遣ってしまった若人の心持、しかもそれがバラなのであるから、感覚的にも若く、理想や夢、はては空想にもふける若さをズバリ表現している。生命溢れるものを感じるし、きれいだ。この人にして、又貯蓄心もある筈、いやうんと貯めていなさることもあろう。

しかしともあれ句はあまり深くセンサクすると折角の味を損ずるから貧しい街のかんじを捉えた、句として、頂いておくことにしたい。

晓明君特殊かもしれないだけ地方色が出ているという事になれば、一面個性あふれるという事にも通じる。各地各様の句材を生かすところにも亦、句のよさが味わえてよいと思う。

凉人君句は見たまま聞いたままだけでは説明に終るきらいが生じて来る（素晴らしい発見の場合は別として）そこに作者の個性とか、テクニクとかが味わされる事は必至だ。

青春の有り金全部バラを買

夢 虹

梅志君夢虹さんは年齢も若く有望な作家であろう。とくに初々しく詩感にすぐれているのが特長で、この句も純真さと率直がただちにうけとれるいい作品のように思う。若い人がいい香りを放つバラの花を愛するのは当然だが、殊にバラの花もクリスチャンとはつき物で、夢虹さんがクリスチャンであることと思わせてはほえない。

晓明君句も若い、作者も若いのである。中七もよく生きて、それをバラ代に遣ってしまった若人の心持、しかもそれがバラなのであるから、感覚的にも若く、理想や夢、はては空想にもふける若さをズバリ表現している。生命溢れるものを感じるし、きれいだ。この人にして、又貯蓄心もある筈、いやうんと貯めていなさることもあろう。



●疲労 ●食欲不振
●神経痛 ●肩こり
●便秘 ●つかれ目

アリナミン

タケダ薬品

回天子君バラにも沢山の種類がある。一株を集めると二株、二株を集めると十株、十株は二十株となる。

若者の感情がそうになっている、その気持を思い切って表わしたので。面白いと思う。

凉人君快哉……近頃の若者に対するレジスタンス的なところもある

るように思われて非常に面白い。ただあえていうならば中の「有り金全部」が少しオーバーなようにも思えるが又考えようによつてはそれだから若さがあるようにも思える。いずれにせよこのような青春を謳歌する人が多い日本になるよう祈りたい。

梅志「この句を生かしているものは『青春の有り金全部』という一見手荒い表現がモノをいっている訳で、誇張であり、また誇張でないともいえる。率直なところが非常にいいと思つた。但し夢虹さんがクリスチャンかどうかは、同君に訊いてみないと分からない。この句によつてそう感じたただだが、これは私の一つの発見でした。」

天明「『句も若い』と書いたが、この若いとは未熟の意でなし。句が受ける全体の感じだったので他意なし、その他、今更何をかいわん。」

回天子「バラでなくても、こりいふ、な者は皆んな、こういうきになる。扱っているものがバラだからその意を表現しているが、バラでなくても、シャボテンでも亦カナリヤでもよい、表現の仕方は同じだ。」

凉人「前に少しオーバーなように……と書いたがこれはコロンブス」

スの卵の様には人の発見には評をしたい凡人のあさましさからで句全体としては前にいったとおり敬意を表したい。

空港で出迎えられた総会屋

宵明

梅志「明治、大正の頃は、タツタ十株ぐらゐの端株をかき集め、株主総会でだだをこねるタカリ屋、すなわち総会屋というものがあつた。どんな会社にも秘密はあるもので経営者にはイヤな存在だが、それが現今では大がかりになり会社の乗っ取りもやるし公然策動する。会社側も総会屋のご機嫌をとる必要も生じてこの句のように空港まで出迎える場合も生じることと思うが、吾々の実生活とは縁遠く、だれが出迎えてそれからどうなるかまですぐにピンとくる人は少ないように思う。」

天明「首相や大統領将又世界的芸能人なら興趣も湧かぬが、世の移ろい、それに社会も複雑で変わりつつある現代、然も空港という舞台へ現われる総会屋が迎えられるところに、軽妙なおかしさと、又囁えぬ社会諷刺も感じられる、とらえ所がいい。総会屋であつてこそおもしろい。」

回天子「空港というのは、これは時代の言葉である。総会屋が空港に着いたのでは全く詩にならないだろうが、まだまだ空港は我々にもてる。それだけに川柳になれるのである。」

凉人「まあまあ今回はどうか御手やわらかに……外に車も待っておりますからどうぞ……臭い所がなければ出迎えんでもいいものを、自分から尻尾を出してやるようなもの。」

「出迎えられた」で総会屋のほうがかえつて戸惑っているかもしれない。社会諷刺の句として私はこのままでよいと思う。」

梅志「空港はつねに影だしい人が発着していて総会屋さんはべつに人目をひく存在ではない。が然し社会の裏面は面白いもので、こうした人達が一般会社の生殺与奪の権を握って堂々と空港へ君臨する時代の推移を思わせる句として面白いと思つた。ちょっと審判調の句である。」

天明「句主が、銀行マン、であり、しかも一介のでなく近き将来に重要ポストに坐れる人物だけに……句が生きているように思う。」

回天子「総会屋という処に何となくいい足りた様ないたらぬ様なものを感じるが、まあ句としてそれで良い様に感じる。まあ総会

的感じはそれでまとまりをつけているのだ。」

凉人「前に述べた通りで何も再度いう事はない。私は写生句よりもこんな社会の、人情の、きびを捉えた句の方が余程好きだしこれが本当に川柳味ある川柳のように思う。」

座布団も敷かずには喋ること

晃男

梅志「川柳には、高度の人間味を追及する面がある。つまりおれにはこんなものがあると相手を認識させる句。例えば路郎師の——君見たまふ菰草草のびてい——という句などはそれに当るが、それとは反対に、日常茶飯の出来事にぶつかつて、面白いことを発見することがある。この句などは全くふれた事柄だが面白い。句会吟などにでも出そうな句だが、仲間うまく、奥さんはツンとしてしまふし、ご主人のほうはもて余している風景がよく出てくる。」

天明「内容的には前批評者に尽きるところと思

う。表現についてふれると、「喋ること喋ること」と、「喋ること止めず」とは結論に於いて同じであるがこの二つの表現から受ける感じは果して同じであらうか、打消しの効果を狙われていると思うのだが、私の耳には一〇〇%の好感がもてない。失礼ですが……。

句境は無条件で賛。

回天子「私はこの句は面白いと思った、世の中には往々にしてこんなのがいる。お茶等、座布団等いらないういいつつ何時間か喋る。まあ良い句だと思つた。」

凉人「三氏の御意見に全く同感です。ただ天明さんのいう『喋ること喋ること』にすれば大いに強く響く事は間違いないがその人の生活環境で表現の方法が違つて来ると思ひます(例えば関東言葉と京言葉の如く)この句のポイント

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ!



東京・大阪
大丸
神戸・京都

明治・大正柳誌巡礼

奥津啓一朗

明治四十一年(一九〇八)

六月十日、川柳とへなぶり、第二巻第六号、菊判十六頁、東京市牛込区揚場町十三番地滑稽文学社発行、編集発行人窪田幸太郎、一冊拾銭。

柳多留初篇(戯刻)中島紫知郎(吉原と川柳)募集吟而笑子選(小間物類)六畳坊選(野菜類)朴山人選(塩)編集局同人選(空気枕)、へなぶり朴山人選(玩具)等が載っている。

天位の句を拾ってみる

大阪 や、子
小間物屋度々背ナを叩かれる
早稲田 禿馬

愛嬌に転ろけた芋を一ツ負け

特別維持会員、安田依々子、松橋柳影子、加山竜之助、窓佳、森井六畳坊、鈴木白馬、木村葉舟、松山亭々子、芥藤桃泉坊、浅野浪志、島田天涯子、維持会員、成家西風楼、酒井曲歩、喜音家古蝶子、栗林古雅、石黒半風子、野崎紫分の面々。(落合行詩堂氏蔵)

明治三十八年十一月創刊(未見)、同四十年一月「滑稽文学」と改題、同年八月「川柳とへなぶり」の一の八となり、明治四十二年六月再び「滑稽文学」三の六と改題、明治四十四年七月の第六巻第六号にて終刊。

題、明治四十四年七月の第六巻第六号にて終刊。

明治四十二年(一九〇九)

四月一日、新川柳、第十六号、菊判三十四頁、横浜市中村町四百七十番地川柳社発行、編集発行人神奈川柳町九百七十八番地塩川喜代志、一部拾銭。

幻怪坊(川柳西解)当百(よしあし草)卯木(江戸砂子と古川柳)竹馬(質疑に就て)等古句研究記事満載。

千二

乗物と日傘の上を花の雲
雨漏りを盥に受ける夜の長さ

喜代志
お妾のそれなりけりに宿の妻

卯木
梅提げて如何にも春の人らしい

(落合行詩堂氏蔵)

四月二十日、矢車、第一号、菊判二十頁、東京市芝区三田功運町八番地鈴木方矢車発行所発行、編集発行人森井嘉十郎、一部五銭。矢車序開きと題し久良岐は

目下の柳壇に二つの著しい潮流があるソレは古句を研究し古句の快楽美を味ひ爰に現代に超越した別天地の美に酔は

ふと企つる者一つは古句以外に自家の青春的主観を謳はんとする者此の二個の潮流がある

此等が従来は混沌として川柳界に一致してゐたが絶えず衝突の度を高めて来た尤此他に普通の滑稽川柳が一般の水平線を成してゐるのは云ふ迄もない

此等の現象が大阪の「葉柳」派となり横浜の「新川柳」派と成つてゐる、近來になつて古句研究熱が盛んになつて「江戸文学」出る「綾志野」が出る云々有様になつた

所で読売派にも此現代を主とする作句派現代に飽足らぬ古句研究派とを生じた、之を近代語で云へば余裕川柳派と非余裕川柳派との衝突で、遂に是が分離は已むを得ぬ事であらう云々

とある。

創刊同人は市井凌花、緒形松寿園、中島紫知郎、芥藤桃仙坊、森井六畳坊(後ちの荷十)鈴木白馬。(落合行詩堂氏蔵)

五月五日、獅子頭、創刊号、菊判四十八頁、日本橋区村松町三番地獅子頭発行所発行、編集発行人安田周吾、一部拾銭。

編集局同人(発刊の辞)太平逸民(古句に耽溺せよ)久良岐(銅粧軒雑説)依々子(古句研究反対派に告ぐ)今井卯木(「詠風柳多

留」に就て)渡部虹衣(川柳と浮世絵)島田筑波(仲条)栗林古雅(古句解説)安永通宝(花見酒)宝歴斎(抱琴偶語)等々記事盛沢山。

募集川柳久良岐選より二三抄録しておく
三四郎
形勢が悪いと悴寝てしまひ
浅峰
妹へ名も無い髪を結ってやり
無茶坊
肩越しに坊はお客の包を見
(落合行詩堂氏蔵)

続

川柳書架

(30)

川柳句集

あげ汐

(越智一水編)

所今治市風早町四丁目汐風川柳社。

阿羅波比

(内藤喜夫第一句集)

★巻頭に、宗寂照、柴田午朗、宅和、磯朗、山根真人、青戸生馬の五氏の序がある。

★本書は昭和三十四年、三十五年、三十六年、三十七年の四年間の作品集である。

★昭和三十八年四月二十五日発行、B6版横綴五〇頁。

川柳作品集

草千里

(田口麦彦編)

★噴煙の創刊十周年記念として刊行。巻頭に太田清明氏の「草千里の創刊にあたって」という序がある。

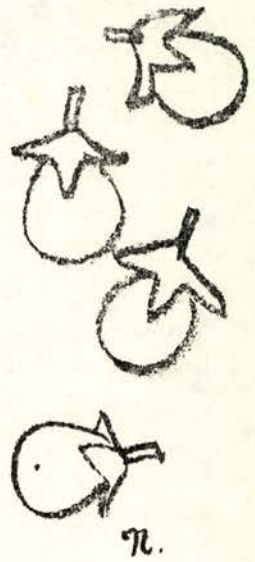
★噴煙中心の自選句集。

★昭和三十五年十二月十五日発行。B6版一六六頁。定価二五〇円。発行所熊本私書箱四五号川柳噴煙社



みなさまのお買物センター

心斎橋
そごう
TEL(271)2221



藤原高子

富士野鞍馬

藤原高子は、中納言藤原長良の娘で、後に清和天皇の后となり、陽成帝を産んだのである。高子がまだ娘のころ、二条の后と呼ばれ在原業平と恋をして、摂津の芥川まで駆落をしたことが、「伊勢物語」に書かれ、謡曲「業平」「雲林院」にも作られている。

堀の破れから来なよと后いひ
(末三)
鳥帽子着て築地の穴を四つん這い
(タル二二)

業平は、築地の破れから忍んで通ったといわれている。藤原家では高子を帝妃にと考えていたのであったが、業

平は藤原氏の専横を憎み、高子の入内を阻止するため、恋愛を敢行したともいわれている。

つれて逃げなよと二条の后いひ
(タル二〇)
ついに二人は駆落となつた。
見かけより二条の后気がふとした。
(傍二)

足弱をまめな男がつれて逃げ
(タル一九)
歩いてはいやと二条の后いひ
(万天三)

その時高子は業平に背負れて逃げたといわれ、それが絵にもなっている。川柳もそれを想像して多くの句が作られている。

笏はわたしに持たせなと負ぶつさり
(貌)
まづ笏はおぶうじゃまだと腰へさし
(拾四)
業平は笏を持っていただろうと推察し、
あてもなく二条通りをおぶい出し
(タル二八)

二条通りを真つ直ぐに背負つて逃げ
(傍初)
どこへゆく気だか二条を逃げは逃げ
(タル二六)

と、二条の邸を出たが、すぐに追手がかった。
追人をも二条通りへおもに出し
(箇初)

二条どの御用とおつて下るなり
(タル三一)
二条通りを白くでうの追人かけ
(二二四)

女を負ぶった公家公家と聞き聞き
(傍三)

二条通を逃げたわけではな
いが、それで二条の后を暗示
している。
出は出たが二条の后立ちのまま
(タル二四)

着のみ着のままで二人は逃げ出したのである。ついに摂津の芥川（大阪市西成区、淀川の支流）までやって来た。
恋の重荷を背負つて出る芥川
(タル八〇)

芥川どっちも逃げるなりでなし
(九九)



街で拾う

★

吉田圭井堂

車掌バス

バス車掌の募集広告がしてある。

但し義務教育終了者か女子高校卒業者で女子短大以上は無資格とある。

事実出ている学歴欄に短大出を書か無ければ、「はいそれまでよ」です。

正直に書いたばかりに不合格
五捨 四入

背番号になって飛び出した自動車
がものの百米も行かぬ内にSTOPの長竿一振りで見事先頭の勇敢なのがスピード違反にかかる。

二台目もついでにやられた。ところが三台目以下は横眼でニタニタ笑い乍ら驚進を続ける。事実は三台目以下は背番号でスタートが遅れた為先頭が五十キロで引っかけた場所では続く三台目以下の車は五十キロが出ていた事は間違いない。だのに五十キロはお

構いなしで五十キロが違反にかかる、恰も労組の先頭で赤旗を振った正直者だけが誠首になったのと同じだ。筋金入りの專業リレーは先頭に立たぬ。タクシーの運ちゃんも決して先頭は走らぬものだ。

正直に赤旗振って誠首になり
ぶどまり

街の小工場では工員獲得のため、技能者養成所の認可を受け、無けなしの金をはたいて教室の五六も造り講師も雇い教材も入れ、基準局から人員の割当てをうける。一年経って二年目には、その分止り最高二割即ち中学卒二十人割当て貰って二年目には三四人だけが残る、他は技能中修者として大手を振って他社へ引抜かれて行く。四五年も経ては最初の一二人か二人、聞けば先生が送り出す時、初め一年だけは辛抱しろよと教えてある。これでは二年目に踏みとどまるのは寧ろ奇跡に近いことになる。

なぶられているのはなんと大人達

行きあたりばったりと出る芥川

(七一六)

きらびやかなる駈落は芥川

(万安九)

ふたりに足跡一人芥川

(タル二五)

やわやわと重みのかかる芥川

(七一初)

下げ髪へすすきのからむ芥川

(タル二六)

細腰を尾花のたたく芥川

(九九二、一〇二)

じよびたりくくくと芥川

(一〇二)

芥川すすきの蔭にししをさせ

(万明二)

芥川越しても先きにあてはなし

(万安八)

その道々でも、

いしきを撫でちやあいやよと芥川

(タル三二)

あれさつめらせ給ひそと芥川

(九九二)

またしては二条の後すりさがり

(万安五)

芥川しんどい声でうれしがり

(七宝十三)

などと、負ぶさったままの

ラブシーンを想像されてい

る。

ところがついに追手は、この芥川で追いついたのである。

芥川草を分けてのせんぎ者

(タル八)

お后を芥のなかで探がしだし

(七一四)

さてひろい野だと仕丁らさがす

也

「伊勢物語」六の段に

「昔、男ありけり。女のうまじかりけるを、年をへて、よばひわたりけるを、からうじてぬすみ出で、いとくらきにいてし行きけり。芥川といふ川をいきければ、草の上に置きたりける露を、かれは何そとなん男にとひける、行ききおほく夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたうふりければ、あばらなる蔵に、女をば奥におしひいて、男弓やなくひを負ひて、戸口に居り、はや夜も明けなんと思ひつつるたりけるに、鬼、はや一口にくひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさわざに、えきかざりけり。やうやう夜も明け行くに見れば、ゐて来し女ももなし、あしづりをして泣けどもかひなし。是は、二条の後のいとこの女御のおほんもとにつかうまつるやうにてゐる給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、ぬすみて負ひて出でたりけるを、御せうとほりの川のおとど、太郎国経の大納言、まだ下臈にて内へ参り給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、留めて取り返し給ふてけり、それをかく鬼とはいふな

りけり。まだいと若うて、後のたににおはしける時とかや。」

とある。それで、

親達の油断鬼一ト口に喰ひ

玉門を鬼に喰われる芥川

(万安四)

とも詠まれている。

追手は、堀川の大基経と大納言国経の二人の兄で、ついに高子は連れ帰られたのである。

芥川ほんのアハハの三太郎

(タル四)

助兵衛と后を原でとかまえる

(万安八)

芥川神代もきかぬふらちなり

(拾四)

そこで業平は斬髪に刑に処せられたので、その髪がのびる間を東下りということになったという。

高子は藤原氏の計画通り、清和帝の后となり陽成帝を生んだが、五十五才の時、僧善祐と通じ、発覚して善祐は遠流、高子はその地位から下りたのである。

貸元のずるい后は二条なり

(末二)

とも詠まれている。「貸元がずるい」というのは淫奔女のことである。



柳志
寸言

勿体ない

本多柳志

仏壇がほこりだらけやないの、勿体ないネエの勿体ないと、まあこの明るいのには電灯をつけっ放しにして、ほんとに勿体ないネエの、勿体ないでは、同じ勿体ないでも其の内容がちがう様であります。

私なども雨上りのまっ赤な水が、どんどん海の方へ押し流されて行く大和川の、川岸に立って之太の水量があつたら莫大な電力が生産出来るのに、何と勿体ない事だと思ふのであります。この通り勿体ないの中には色々の、内容がある様であります。何れにしても何かそういう事はすべきではないんだ、という一種のものを惜しむ心、役に立つものを無駄にしないでしようという、ものに対してすまないといった様な心が含まれている様であります。

川柳は原則として十七字で作られる短い詩であります。若しこの中に省いても良い、無駄な文字が

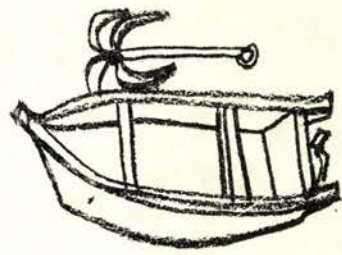
ザーの地
エチ心
フタそ

フェザー剃刀

一字でもはいつているとしたら、何としても勿体ない。といわなければなりません。句会などで選をする場合に、斯ういう勿体ない句を見ますと大変に、惜しい気がしてなりません。そして大抵の場合、そんな無駄を省いてしまった方が却って、句の姿も整いますし、作者の句意もはっきりとして所謂名句になる場合が多いのに、気がつくのであります。

まっぴる間の無駄な電灯を惜しむ心と同時に、十七字の中の無駄な一字を惜しむ心も又、養いたいものだと思ふのであります。

電化してからのレジャーをもて余し。



大陸川柳人一堂 に会す

東野 大八

大阪で、大陸川柳人の集い、というのがあった。五月はじめてのことである。

行こうか、どうしようかと随分迷ったが、気がつくとい僕は大阪駅のホームに立っていた。土曜日だったのだが、サラリーマン二等兵には半どんはない。だが、ゴマかすことにかけては海千山千の僕であつたわけだ。そうなるまでにはいろいろ苦心したらしいが、とにかく大阪の土を踏んでいたのである。

会場は北極星である。麻生路郎先生とはじめてお会して、さして大いに語つたのもこの北極星であつた。煮えつまって、真黒になつた鍋をはき込んで、路郎先生は青年のように、発らつとして手をふり、アゴをふって語られた。こちらでも先生以上に少年大八になつてはしゃぎ回つた。ああ、あれから一むかし以上もたつた。僕はそうした感慨にふけりながら、北極星

の高い階段を一つずつ上つていった。

会場はコマギレになつた小さい客席の一つだったが、まだ誰もきていない。汚いチャップ台が三つ窮屈そうに並んでいた。やがてここに煤球児とパイカルと鯛子の匂いのしみ込んだご連中が集つてくる。そう思うとそのせまい部屋が小便可さい安公寓の一室のように感じられてきた。懐かしく胸迫るその感触、僕はこのムードが欲しかったのだ、とその座について、いつのまにやら大阪にたどりついた理由に思い当つた。

やがてもつそりと二人の男が顔を出した。長い顔に、ニラのよう

の安アパートへへきえきしながら上つてきたあの顔が一瞬にして脳裡に浮かび上つてきた。もう一人の老掌櫃は日南先生だ。この方も二十年以上のご対面である。

やがてこの日南先生が紙片を作

り、木耳さんが席題をかきはじめ、僕がそれを壁に張り出した。こうやって昔は壁に向いピンを押して、座ぶとんを並べたものであつた。木耳さんが字をかき、僕は壁面をなでた。木耳さんも若く、僕も多情多感な美青年であつた。け。

「青年老い易くして学成り難し

う具合でいつのまにやら部屋はたちどころにいっぱいになってしまつた。

平松圭林—この人は北京川柳界が初対面だった。紺の背広によく光る眼鏡、端然として無口で、その貴公子然たる姿、形は会場付近の女の子の胸をわかせたものだ。「あの人が頭をモシヤモシヤにすると東海林太郎そっくり」

という女中の声を、今も僕の身はしっかりとえ込んでゐる。

「大八が圭林の横へ坐ると、引き立て役みたいだぜ」

と青竜刀さんが冷やかしたもんだが、この美男子「通州の圭林」も

老いた。それはウソのような具合だが、根が男前だから僕はど傷む率は低い。笑つたり、すましたりすると、北京の面影とその匂いがした。

奥本唯然—この人は新京の電々会社のさつそうたる青年課長さんだった。ここのグリルでおごつてもらったAランチのフライのうま

かったことを僕の舌の先は、今も覚えてゐる。この人も淡く老齡に入つて、一見隠者のごとき風格がある。

山下岸柳—撫順炭鉱の露天堀の煙が、そのおつむのあたりから立ち上つた。青い協和服で生々としたいい青年官吏も、今では至極重

厚な老重役である。この人も二十六年ぶりだ。

「打ち明けて話す相手も無一文—この句覚えていますか、引揚げ者の『むつみ』に出た句ですよ」

と僕がいうと、岸柳さん、そうでしたかナ、と懐しそうに笑う。その顔に安武仙涙、福井天弓、菊地岩吉の顔がうかんだ。

大井正天—この人は戦後、岐阜で会つた。今も昔も大きな顔、大きな声、大きな身体、何もかもスケールのでっかい老柳人である。そのほか言也さん、淀月さんなど、話ははずみ、酒が回つた。水府さんとみえた斎藤清幸さんは、今日のゲストだが、この人も満洲ユカリの人ときいておどろいたが

「今どき句歴十年なんてオカアしくつて、という顔ばかりで内心仰天しているようなわけでして……」とけんきょにあいさつされていたが、この人とても四十以上だときいて「こんなに若いとさぞ楽しいだらうなあ」と思ったこちらがふとわびしくなつた。

大陸川柳人はすべて老い、すべて黄土層の忘却の彼方に埋没しようとするのか。

「自分の前に道なく、自分の後ろに道はある」

光太郎のそうした言葉が、ただ

意味もなく僕の念頭をかすめすぎ
ていった。

戦争無かりせば、日本の敗戦、
大陸よりの撤退、こういう現実が
もしもわれわれの上になかったと
するなら、もっと数多くの柳人が
いきながらえ、ここにいる人たち
もまた一家一流の胴元として、そ
れぞれの地域で柳人天国のだいご
味をかみしめていたことだろ
う。

「私の晩年を飾るこの部屋、もう
私にはただこれだけです」

そういつて四国の片田舎で、老
残の身を侘びしく身まかつていか
れた蛭子省二先生。この部屋とい
われる小さいその一画の障子に
は、一つ一つ川柳が丹念に書い
てあった。思ひ出の句、懐しの柳
人の名が障子の小さいワクの中に
数限りなくそこには書かれていた
のだった。

「大八さん、一度あいたいです
ね」

清水市から毎日のように便りを
頂いた和田黙然人さんも今はこの
世にはない。悲惨な現世からのこ
の人の逃避であったが、あの温か
い眼さしや、はあ、ときき直して
あける大きな耳横の手はいまも僕
の眼の前にある。

この集りで、僕はまた八年ぶり
に句せんとった。題は「引揚げ」
と「城壁」である。心うれしく、

若やいで来しく、久しぶりに本当
に久しぶりの句作の一句一句とい
うわけだが、一方が天位に抜け、
一方が地位に抜けたことも万更で
はなく、いつか得意の鼻の先を
コスっている罪のない僕だっ
た。

——城壁のある郷愁へ柳絮飛ぶ
この当日の句こそ、その日の僕
の懐旧のすべてであった。

会が終わって木耳さんと正夫さ
ん、それに青竜刀さんいっしょ
になって、千日前
をブラブラした。

「ABC」という
喫茶店を妙に木耳
さんがこだわると
思ったら、それは
ハルビン風のデラ
ックスなムードい
っぱいの店だっ
た。

つるつるしたふ
ともを出した若
い娘二人と、車夫
のモミ引みたいな
若者二人がすぐよ
こでべちゃくちゃ
していたけれど
も、老人組も不感
性なら、先方さん
もこっちの方をお
けらから、墓石のように黙殺し、若
さから湯気をたててエキサイトし
ていたことだ。本モノのこうした

たはずまいの中で、かつての若い
僕はこの業に傍若無人に女の子の
ひざをたたき、ふくよかな二の腕
をかき込んで、死ぬのは他人、老
けるのもそこらあたりのご連中と
ばかり至極単純に片づけ、老死い
ずくんぞ知らん、の顔で放らつ
の限りをつくしたものだ。川柳もま
たそうした川柳の中の、完全なヒ
マつぶしから出発した。だが、今
は何もかもがちがった。一人はせ
つせと寄せ書の上書をかき、あと
の二人は過去の遠い遠い昔を、人



不朽洞を訪うた三氏 東野大八氏（美濃加茂市）の案内で石原青竜刀氏

（東京都）・宇和川木耳氏（布施市）等五月五日午後一時紫雲路邸主幹と歓談

の名をかりては近くへとたぐりよ
せようとす。若さは長く、老い
は東の隅だ。僕はなんとはなしに

感傷的になり、ふいとわが身のつ
れなさに、息をのむのであった。

木耳さんに誘われて、遠い布施
にある木耳さんの家に入った。小
ざっぱりした住宅の一室だった
が、かつての木耳さんが大陸の仕
事ぶりをしので、いささか索然
となった。だが、当の木耳さんは
少しもコセコセしない。落ち目の
身には木耳さん同様、三者三様、
帰するところに変わりはない。

そんな点からか酒いっぱいの卓
上で、三人三様の柳論をぶちまけ
合せて、気がつけば午前三時だっ
た。随分エキサイトして、これを
テープレコーダにとつてあとでき
きたいね、と三人ともが打ちうな
ずき合ったことだが、酒の酔い
と、眠気での中味はキレイさっ
ぱりと忘れてしまった。

朝になって僕は、「川柳雑誌」
の路郎先生ところへ寄ろうか、
どうしようか、といひ出したら、
木耳さん、青竜刀さん二人とも
「じゃ、三人いっしょにこうじ
やないか」

ということに意見一致。よく気の
そろふこと無類である。これも何
年ぶりの懐旧感と、柳人故の持味
かもしれない。

路郎先生に久しぶりにおあいし
た。すごくお元気なのにびっくり
して大急ぎで安心した。ビールが

たちまち林のように並んだ。林さ
んのお酌である。

「きょうの林さんはキレイだね」
といつもあっている人のような口
をきいたら、フスマがあいて当の
林さんが顔を出したのはテレクさ
かった。どこかへ行かれたつも
りのこちらの算段だったのだ
が……。

やがて「霞乃先生にお会いする
までネバー」といつていた青竜刀
さんだったが、先生がニコニコと
お帰りになったので、現金な
もの、早速お暇することにし
た。

帰りの車中、青竜刀さんと木耳
さんは、路郎先生をしきりにホメ
ちぎっていた。人間は、直接会っ
て話さない限り、相手の人格はわ
からないものだ、というのがお二
人さんの結論のようであった。

すばらしい
着心地

蝶矢
シャツ

CHOYA
SHIRT CO. LTD.

一路集

余生

大西八歩選

余生奉仕を売りのものにして立候補 素身郎
 ビク提げて余生釣れよと釣れまいと
 療養に余生を送る 不倖せ 花美
 余生とは言いつ客の切れ間なし 隆子
 クラブ振る腕に余生は考えず 生薑
 恵まれた余生に巾の広い趣味 王石
 養老院なぐさめ合っている余生 杏花
 趣味に生く一人居の余生も亦楽し 照子
 墳墓の地遠く余生を孫の守 流路
 金貯めて余生ボンヤリ送って居 寿美司
 古本を漁る趣味あり元教授 三林坊
 余生には紙より薄き世に映り 同
 閑々と見えて余生の日々速し 成則
 郵便夫余生の門を素通りし 光道
 隠退をして益哉の色が冴え どんたく
 書生した屋敷で夜警する余生 句楽坊
 別荘で余生を送る い、身分 祥月



肩書きを捨て、余生を鉢いじり 隆文
 余生まだ生きねばならぬ職探し 圭水
 余生さえのんびりできぬ交通禍 同
 人生のたそがれ余生のことふれ 弘明
 氏神の渡御へ捧着る余生 淀月
 困地より田舎が向くと云う余生 同
 コレクションマニアの余生記事になり 同
 余生悲し子供に先立たれ 静水
 血圧と糖が余生をおびやかす 和三郎
 恩給の余生故郷が待っていた 可住
 余生いま歌で名高い浜に立ち 保夫
 平凡な一日一日大事にし ろ亭
 余生とは言わず会長にまつり上げ 圭井堂
 倅せな余生へ花あり星があり 恵二朗
 官僚の余生へ肩書つきまとい 十九平
 社会奉仕へ余生捧ぐと知事辞職 同
 宿命は余生やっぱりボロを着て 孝正
 車窓から此処らで余生過したい 蛙水
 反省を余生の中でくり返し 千翁
 一坪の庭へ余生の苗を植え 静波
 後添いがほしい余生をもてあまし 雄々

恩給の余生みんなてつつきに來 たくお
 煉炭の余生夜中に豆が煮え 呂し
 身のあかしたて、余生が短かすぎ 宗太郎
 文化財余生もきびし芸の道 代仕男
 満ち足りた余生がじつと置かず むじな
 雨の音風の音しんみりきく余生 愛鳩

佳吟

後添えを貰って余生欲を出し 周甫
 余生まだむたがられる席に居り どんたく
 白足袋でくらす余生を羨まれ 淀月
 ショボ／＼と妻も余生へ随ってきた 可住
 余生また留守居の役にあまんじる 恵二朗
 時々店へ顔出しする余生 愛鳩
 家出した娘に余生養われ 旭峯
 嘸みしめる余生の中の人間味 千翁
 部屋貸して欲しいと余生見くびられ 淀月
 次々と夢を素通りした余生 和三郎
 総入歯ゆっくり洗うのも余生 恵二朗
 仏間の灯たやさず余生ひそといる 同
 保険屋が余生の心配して呉れる 宗義

人

偉い子に育て、余生一人住み 藤波
 年金を掛けて余生を疑わず 涼人
 倅せな余生湯槽の湯があふれ 雄声

若さ

八木摩太郎選

喪服にも若さこぼれる未亡人 宗義
 何も彼も若さが物云う新時代 照子
 髪染めて少し若さを取りもどし 流路
 無茶をする若さうらめし木葉髪 新石
 七十で紙治は若く頬冠り 周甫

若禿げの課長の顔にある若さ 石峰
 時速三十俺にも若さ残って居 成則
 正論と信じて妥協せぬ若さ 光道
 歌謡界若さでデビュー今日の地位 秀峰
 祭壇の若さが悲し交通事故 隆史
 若さには勝てず耳順の年も越し 専翁
 若さには勝てぬ時代のずれを知り 代仕男
 高校へ行く子へ若い後妻来る 三林坊
 この輪でお若く見えるを真にうける 野迷路
 若者と若われ若者腹を立て 野迷路
 若さなぜかくして歩くサンタラ 野迷路
 もう一度若さ夢見る加美の素 晃男
 夢多き若さ素朴な故郷を捨て 魁光
 スラックス若さヒップを横に振り 雄々
 無理をした若さを叱る聴診器 雄々
 主義主張ゆずらぬ若さ惚れこまれ 花竹
 女房の若さについて行けぬ年 勝子
 恵まれた若さを無駄に臥て過ごし 静波
 慟哭の若さをくやむ事故のあと 寿美司
 村八分受ける様に行く若さ 辰始
 スクラムの腕腕若い血が通う 萩路
 若さにはやっぱり勝てぬハイキング 恵二朗
 冗談はほんきでそっぽ向く若さ 孝正
 合宿の米びつ空にする若さ むじな
 アイデアが意表をついている若さ 愛鳩
 二十代の若さを誇る立候補 藤波
 還暦の若さが残る肌をつや 杏花
 はち切れる若さを母はとがめない 千翁
 気ばかりの若さ互に笑い合い 隆子
 木の葉髪のまま若さをすり減らし 生薑
 六十才まだ若いです立候補 三五島
 若さ子にささけて母という誇り 旭峯
 十代の若さ後先き考えず 古心

父親の意見若さは煩さがり 隆文
 髪染めて若さのほしい髪をなで 祥月
 堂々と師へ反論の若法師 句楽坊
 はち切れる若さ水着のシミに立ち 桂仙
 窓みんなあけっぱなしで寝る若さ 淀月
 スクリーン買えて若さを突つ走り たけお
 ためらいもせず若さが言つてのけ 静水
 追い抜いた屋敷若さが抜き返し 和三人
 喰つて着て若さは蓄める事もせず 涼人
 夢ついで醒る若さがうらやまし 保夫
 失敗もある若さをかってやれ 圭井堂
 問われては私も年をかくす頃 ふじ
 若いのに似合わずチチな事を言い 昭夫
 ありあまる若さがあつて金が無し 素身郎
 若さ今日無事に過ごせたコップ酒 孝風
 お若いと言うてチップをはずさる どんたく

佳

芸術へ若さを貸してモデル台 蛙水
 金棒に若さの美技をみせる初夏 八九寸
 若さまだ失いませんとウインクス 圭水
 失恋へ若い若いとほげまされ 花美
 処女峰に挑む若さにある魅力 十九平
 若さまだ失せぬ舞台のあでやかさ 宗太郎
 もう十年若けりや貴方と別れてる すみれ

人

若い気がフット恥しい白髪抜く 初甫

地

若いとはいいな嫌いとズバリ言え 雄声

天

若いのに何の持病か灸を据え 光郎

軸

山寺は淋し尼僧の若さにも

品切れ

傍島静馬選

品切れに極上物を奨められ 代仕男
 品切れと言うても子供が承知せず 静水
 品切れ中ですと体よくことわられ 孝正
 品切れで買わずにすんで得をした 照子
 品切れのその品持つている自慢 萩路
 品切れの品に病人でござらせ 隆文
 品切れになつて値打を見直され 圭水
 月給日近く品切れできはじめ 秀峰
 品切れへぶつきらほうの女店員 保夫
 品切れを詫びておやじの低姿勢 ひ呂し
 品切れの節はと山と積んで待ち 宗太郎
 品切れと云えば買溜めしたくなり 専翁
 品切れへ隣りで一寸間に合わせ 三林坊
 品切れで待たし一割値を上げる 隆子
 品切れにならぬうちにと口上手 生薑
 品切れを普朗樂は買うてくる 旭峯
 品切れにしようと裏で儲うけて居 古心
 品切れを役所はつんとして答え 涼人
 品切れへ頭を下げる電話口 初甫
 品切れの札店頭へ派手に吊り 祥月
 品切れのミルクは蔭屋へ流れ 光道
 品切れを盗買ったつもりで貯めておき 猶雄
 最初から無いのに品切れですと云い 桂仙
 品切れのはず卸屋へどこおおり 愛鳩

あの時の品切れ今の語り草 藤波
 品切れを一足進いと云うて詫び 同
 品切れのバット都会にあふれた むじな
 品切れと云うて奥からさつと出し 杏花
 いやな奴品切れ云うて追い返し 宗義
 小商い四五人売ると品切れし 蛙水
 品切れに代用品を負けてくれ 静波
 品切れに裏口という顔があり 同
 品切れを云うて勿体つけて売り 雄声
 三四軒廻つて品切れ諦める 同
 品切れになりそうでならぬ特価品 恵二朗
 品切れのはずを顔役買うてくる 同
 品切れへ代用品が間に合わず 十九平
 品切れへ子供手ぶらで帰つて来 昭夫
 デパートで品切れ場末で売残り 素身郎
 品切れと云えはつとさ 他店へ行き 孝風
 品切れのピストルへ母ははつとする 淀月
 品切れのきざみ煙草を探しあて 同
 行列の途中で品切れしてしまい 雄々
 品切れにしようと値段また上げる 晃男
 貸して呉れる店は時々品が切れ 雌光

佳

開門を待つて来たのにもうしまい 圭井堂
 ど忘れを品切れにして事すませ 句楽坊
 開店休業空瓶ばかりのホームバー 恵二朗
 品切れを詫びて豆腐屋歩を止めず 和三人
 品切れへ夫は胸をなで下ろし どんたく
 品切れを見越して買うて腐らせる 同
 品切れを仕入れてからは出なくなり 千翁
 あはうくさ品切ればかり買いくる 隆子

人

地

天

軸

品切れへばつぱとはたきかけている 周甫
 品切れをはやらぬ店へ買いに行き 蛙水
 一げんは品切れですとことわられ すみれ
 品切れにしとくと主人起きてござ 桂仙
 品切れや云うてあるのに妻が出し 可住

柳箋

本誌への投句はなるべく柳箋をお用いください。選者が選句されるのに整理上助かると云つておられます。

一冊(五〇枚綴)三〇円

バック・ナンバー

本誌のバックナンバーの株が天井知らずに上つていますが、趣味的に製本される人達のために出来るだけサービスしますからこの機を逸せず在庫の有無を往復ハガキで質問合せ願います。

送費一冊事に二〇円

川柳雑誌社サービス部

柳界展望

旬会

▼本社主催第十回川柳まつり（麻生路郎誕生日祝賀川柳大会）は七月七日（日）午後一時から大阪市南区難波新地四番丁四北極星四階広間で開催する。主幹の誕生日の十日を繰り上げ日曜日に開催することにしたので地方柳人お誘い合わせの上この機会に多数ご出席願いたい。▼南海電鉄川柳会（大阪市）句会は六月十三日（木）午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）句会は六月二十八日（金）午後五時半からコクヨ株式会社会議室で開催。▼南区医師会文化部川柳句会（大

阪市）は六月二十六日夜、中島小児科診療院楼上で開催。▼大阪通信病院川柳会六月句会は二十二日（土）午後一時から北館五階会議室で開催。以上路郎主幹出席。▼川維岡山支部五月例会は十八日（土）岡山鉄道クラブで開催。▼かはる誌刊記念句会（東京都）深大寺吟行は五月二十六日深大会館で開催。▼第六回近県川柳大会（竹原市）は九月一日（日）正午から竹原市本局前春華園で開催。兼題、買物・一すじ・鉢巻・三度目・リンゴ箱・上と下・竹・ファン・順番・縫い目、各題三句、投句は巾三連長さ十八種の句



北海道の旅から—— 若本多久志氏は五月二十九日アイヌ部落を訪問。（アイヌに多扮した多久志氏）
うっついてメノコ握手へはにかみぬ 多久志

消 息

箋に明記の上投句料五十円（切手可）封入の上、広島県竹原市竹原川柳会宛。▼第七回若手川柳大会は六月十六日（日）午前十時から北上市諏訪神社社務所で開催。▼第五回近県川柳大会（長崎県）は五月二十六日（日）午後一時から雲仙国立公園小地獄雲仙ユースホステルで開催。▼川柳こなゆき十五周年記念北海道川柳大会は八月十一日（日）正午から小樽市公会堂で開催。▼第九回富士紡川柳交歓大会（愛媛県）は七月二十一日（日）午前十時から開催。

▼中島生々庵氏（大阪市）は六月十一日（火）より十六日（日）まで阪急百貨店美術部八階催場で直原玉青指導、青玲社「日本画余技展」へ出品された。なお同展には中島小石さん、河村瑞川氏も出品され川維のため気を吐かれています。▼岩崎愛二氏（京都府）は六月一日、今日から信濃飛弾の山に遊びます。と寄信。「山は雲麓は緑客まばら」▼福田丁路氏（高槻市）は五月二十五日、寸暇を得て浜名湖に遊び、折よく晴れた湖畔の朝を堪能された。「浜名湖を緑の風がそっと吹き」▼浜田久米雄氏（岡山市）は五月二十六日句集刊行の打ち合わせに来社、路郎・葦乃夫妻と歓談された。▼戸倉普天氏（兵庫県）は愛孫を仙台に尋ね、飯坂温泉から福島、吾妻連峯のスカイライン、蔵王のエコ



松露百号記念全山陰川柳大会

— 五月十二日米子市皆生温泉ホテルで —

（大阪市）は五月十六日大阪を発って九州一週、夫人同伴の旅をされ、別府、林田温泉、指宿、雲仙、嬉野の各地を見物、二十三日帰阪された。「青島もよし旅はよし酒も呑め」▼中島紫郎氏（長野県）から、今や山は新緑の目ざめるばかりの色に包まれ、すつくと立ち上った山が天へせまっていますとの寄信があった。氏は近刊集発刊の由。▼阿部佐保蘭氏（東京都）はお孫さんを送っての帰途、秩父三峰神社、雨の長瀬を夫人と清遊、六月五日帰京された。長瀬にて「赤壁の中を抜けてく舟一つ」▼若本多久志氏（豊中市）は五月は旅に恵まれ月初めに本州の最南端へ行き、月末にはさいはての国北海道に遊ばれた。牧歌的な石狩の平原にはそぞろ詩情を感じ、函館では啄木の慈いを偲ばれたが、五日間の道内の旅は永く想い出に残ることでしよう。六月二日付、「北海の啄木の碑にも思い」▼梶川蘇堂氏（西宮市）は六月三日仕事で九州一周の旅行に出發、博多、別府、宮崎、鹿児島、熊本、長崎と何か知ら果なき流浪の旅のようですと。「気安めの櫛でいねいにくも旅」▼小西雄々氏（米子市）から、五月十二日（日）松露百号記念川柳大会が米子市皆生温泉ホテルで開催されたが、席上、米子の川柳会の生みの親、育ての親の

不朽洞の人々



新三菱重工業KK・水島自動車製作所
第二工務課長 田坂 敏 明氏

新聞をとられワイフにつめよられ

方大

新聞を見ていて不真面目な政治屋によく憤慨しているが、妻にいわせると私は某天家の部類にはいるらしい。妻や娘がどんな髪形にしようと、服をええようと、さっぱりお気付きなく、頭が禿げてからは仕事に關係ある本ばかり読みふけり、家庭の事は一切、妻がやきもきして処理してくてはならないから、というのがその理由だそうです。

正誤

(薫)

▼前号四六頁四段「新刊紹介」十行目、本誌副主幹とあるは編集局長の誤りに付訂正。▼同四二頁上段六行目「参道に入り」の句に清人とあるは清子の誤りに付訂正。

故三嶋美笑氏未亡人繁子さんが、涙ながらの挨拶を述べられ参会者一同を感激させたとのこと。▼丸尾潮花氏(高槻市)は五月三十一日で日立造船を定年退職された。▼工藤甲吉氏(青森市)は五月十七日、十九日植樹祭でご来県の両陛下の取材下検分で十和田湖へ回り、路郎先生のご来遊された去年の七月二十三日を思い出し、ひとしおなつかしさを覚えました。十和田は新緑の初まり、酸ヶ湯附近はまだ残雪も多くまだスキー客でにぎわっており沿には水パジョウが純白の花を開いてとてもきれいです。「そちこちに冬も残して十和田、春」▼阿部佐保蘭氏(東京都)は秩父から上高地、白骨、松本へ。河童橋にて「雲なけりや穂高と僕と差し向い」▼岡田甫氏(東京都)から、毎日新聞の「茶

の闇」評読、新俳句では俳句の雑誌としか世間では受取られぬでしょう。川傍川柳初篇研究もすでにあちこちから、なかなか面白いと言つて来ています。▼弘津柳慶氏(柳井市)は五月二十五、六の両日、秋芳洞、長門湯本温泉、青島、萩市内見物と巡遊された。六月十一日から経理課長会議、管理者研修会議に残り二十二日まで広島で釘づけでした。▼築山快夢起氏(ホノルル市)は六月十七日東京の歌舞伎座、十八日から富士五湖、二十三日から鳴子から新潟方面、善光寺、月末は西伊豆の旅を終え、六月三日海路帰布された。▼八木摩太郎氏(堺市)は六月三日から六日まで、千葉、東京、静岡を周遊、伊豆畑毛温泉から、

信を寄せられた。▼仲どんたく氏(神戸市)は別項記載の通り愛嬢を嫁がせられ、「二女二男のうち一丁上りというところながら、父親としての寂しさも無きにしもあらずです」と。▼吉田圭井堂氏(堺市)・傍島静馬氏(神戸市)は五月四、五、六日朝日フェスティバルホール階上で開催された赤松柳史門下の俳画展に出品された。

句集

十八年九月二十三日発刊予定。明治末期から大正昭和にかけて川柳の革新を推進して来た著者の二百句と評論が収録される。B6判箱入価格三百円。申込みは長野県須坂市新町、西貝篤方。▼村山白雲自選第二句集「鳥はあるく」は昭和三十八年七月上旬刊行予定、B6判八四頁定価三百円。申込みは秋田市横町二一、村山兵太郎宛。▼川維京都支部から句集「川維」が昭和三十八年五月十六日発刊された。三十五年五月句会から三十八年三月句会までの句を収録したもので京都柳人の活発な色彩が興味深い特色ある句集にさせた。菊判七十七頁。▼小林不浪人遺句集は予定より遅れ六月刊行の予定、B6判百二十頁定価三百円、申込みは黒石市大字横町、中村瞭象方小林不浪人句碑建立委員会。

転居

▼本田清人氏(布施市)は布施市大連一八一六番地へ転居

▼河相すむ氏(西宮市)は改築中の家屋が完成、六月八日移転された。西宮市川東町一〇九。

▼渡辺伊津志氏(宿毛市)は高知県宿毛市大島字片島宿毛海上保安署へ。

慶

▼仲どんたく氏(神戸市)長女寛子さんは山田安氏(丸紅飯田勤務)との婚約整い、四月二十日大阪綿業クラブで華燭の典を挙げられた。お慶び申し上げます。

弔

▼川村伊知呂氏(大阪市)は六月五日午後九時四十五分、大阪市大病院に入院中脳出血で死去。年五十七。告別式は七日午後二時から南区北桃谷町七一の自宅で営まれた。氏は番傘同人。謹んで悼む。本社から喪方女吏、生々庵、白柳、いさむの諸氏等が会葬した。

第百四十八回

大萬川柳

「宿命」

入選発表

選者 麻生路郎先生

投句総数六百二十五句

入選 五十句

丸龜 ゆすらん

宿命は紙幣を数える職で果て

丸龜 天目

宿命と諦め切れば世は広し

大坂 酔泉

宿命は九尺二間でさんま焼く

大坂 ゆきを

宿命のように東大受けちゃ落ち

羽曳野 廻亭

妻の名もまた宿命の露子なり

石川 雅城

拒み得ぬ弱き宿命の子を孕み

大坂 専翁

宿命と諦めかねる職死の子

泉南 美恵子

宿命を知らずに育つ部落の子

大坂 保夫

浅学の宿命住友の平社員

大坂 玲人

宿命の子供に乳の出ぬ女囚

興 魁光

蟻の宿命一生を出稼ぎす

罪なき子に宿命の重たすぎ

空閑 忠三

宿命がもう西成の風に馴れ

大坂 文秋

宿命を説き改宗に踏み切らせ

神戸 静馬

宿命か息子も嫁に敷かれて居

岸和田 きさ子

サラブレッドと生れ芸術品にされ

岡山 十九平

亡びゆく宿命詩人に美化される

大坂 野葉

赤い灯も知らずに独り妻を播く

同

両親を養いとつがす四十過ぎ

大坂 文蝶

宿命か悪役ばかりで名を知られ

同

緋の袴みこ宿命の座を守り

仙台 光道

この子殺しわれも死なんと母心

同

強盗に殺されるために金を貯め

空閑 真奇

宿命が代々続く養子なり

同

宿命か二度の妻にも先立たれ

石川 宗太郎

無理心中死にたい方が生き残り

玉碎で残り交通事故で逝き

同

底抜けの善人釜ヶ崎で果て

同

積善の家系が学者ばかり出る

岡山 東岸

売れっ妓の宿命かなしい恋となり

同

学生に宿命論をあざけられ

五客

宿命は母娘二代の夜の蝶

京都 王石

宿命じゃないわと二号笑いこけ

大坂 玲人

宿命がどうかしましたかと愚妻

京都 素郎

宿命をさすに蛙の子はかえる

京都 方大

宿命の子を独房で生みおとし

大坂 梅里

人ノ句

大坂 野迷路

宿命にしては殺生な野つぼの死

地ノ句

若坊んと呼ばれやくさを継ぐさだめ

岸和田 きさ子

天ノ句

大坂 水客

こけし造る家に生れて山おりず

以上

大万川柳ベストテン(六月現在)

一 薫風子 一二、〇 大坂

二 文蝶 九、五 大坂

三 梅里 八、五 大坂

四 好郎 八、五 大坂

五 圭井堂 八、〇 堺

六 方大 七、五 倉敷

七 遠二 六、〇 笠岡

八 水客 六、〇 大坂

九 真奇 六、〇 大坂

一〇 柳志 五、〇 大坂

一一 静馬 五、〇 神戸

一二 東岸 五、〇 岡山

一三 恒明 五、〇 大坂

一四 珠笑 五、〇 枚方

一五 野迷路 五、〇 大坂

一六 桃里 四、五 笠岡

一七 満秋 四、五 名古屋

一八 きさ子 四、〇 岸和田

一九 晃 四、〇 大坂

二〇 宗太郎 四、〇 石川

次の兼題「悪名」五句以内

〆切 七月十日

発表 七月二十日

八月の予告「雀」

〆切 八月十日

発表 八月二十日

投句先 大阪市阿倍野区松崎町三

ノ一〇

大萬川柳会



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 六月旬会 (大阪市)

6月10日 午後6時
会場—— 千日前自安寺

今にも降りそうな梅雨空、川柳の道に
親しむ者は、憂うつを吹き飛ばして、会
場は朗らか、今日も新顔が見えるものた
のもし。これは、来る川柳まつりの前
哨戦とも見える。多久志氏の柳話は、路
郎師の句や豆秋の句を引例して川柳の
話、川柳の一茶——豆秋もはは笑んでい
るであろう。華罵題の中三題の天位今日
は水客ブームともいえるベテラン振り、
今席の不朽洞カップは、これ又句豪の松
江梅里氏の頭上に飾られた。「命ある句
を作れ」と三唱してお互いに決意のほど
を見せて散会。午後九時。

(座)

出席者——路郎、生々庵、多久志、黙
平、千代、圭井堂、静馬、八郎、保美、
柳雲子、与呂志、摩天郎、市郎、野迷
路、野菜、柳志、良、判志、舟遊、玲
人、いわを、専翁、一舟、一栄、清子、
水堂、水客、白溪子、客遊子、白柳、メ
女、春巳、句楽坊、東天紅、みさ子、文
秋、すゝむ、雄声、薫風子、梅里、季
實、井平、秀子、古方、庸佑、宏子、霞
乃、

兼題「待機」 麻生路郎選

果報待つわけではないが寝るとする
乾釜の用意もできて待つ 出漁 光道
もう生玉と待機でから沙汰も無し 八九寸
八百長のない台風に待機する 旅風
待機して居給えと聞きそれつり 玲人
待機する子等に淋しい折一つ 千代
手ぐすねを引いて三軍というポスト 東天紅
待機しているとも知らず酔うていに 客遊子
憲法改正何やら待機する臭い すゝむ
花嫁を待つよに大風待機する メ女
待機して我番になり気分抜け 野菜
待機やと左遷の自分に云い 水京
待機した四人目なのに女の子 一栄
陣痛へ待機のお湯が冷めて来る 圭井堂
暴落に株屋は時期を待ちなはれ 静馬
待機といたげでええと無いじまい 同
教え子が待機していた山の駅 客遊子
風吹けば待機雨降れば待機 良
このチャンスに待機せよとはじつに 八郎
夕焼けやけ明日が待てる寿司おやつ 柳志
老ぼれて冥土の便り待つばかり 井平
嫁貰うてと待機したのに別居され 一栄
いざという待機ダイスを振りながら 舟遊
遺産分け待機する間ももめている 文秋
加工した鼻で良縁待ちつづけ 柳志
徹宵の待機を犯人は笑うよう 庸佑
当確のベルが待機へ鳴って来ず 圭井堂
待機する次点次点のままとなり 文秋

晴耕雨読という名で待機する 水客

兼題「口絵」 清水白柳選

部下待機させて悠々湯につかり 梅里
口絵ばかり機に張った四疊半 寿美司
モナリザを口絵に性技のことも記事 光道
大人まで口絵の立見しては去に 旅風
口絵だけ抜いて目方で週刊誌 野菜
待たされてまた見せられたこの口絵 梅里
よく売れる訳は口絵が知っており 庸佑
さりげなくきわどい口絵の雑誌買う 水京
売店で口絵だけみて汽車を待つ 客遊子
買いもせぬのに口絵だけ見て廻り 市郎
大臣も口絵に載ればおじいちゃん 玲人
落付いた淡い口絵も同人誌 柳雲子
月世界口絵に載せて子の雑誌 白溪子
理想には口絵に出てる佳い住居 井平
玉の輿口絵が持つて来て呉れる 千代
口絵まで彼女に見えるグイトの日 雄声
口絵まで催めて貸す貸本屋 文秋
口絵では離別しそうにない二人 摩天郎
口絵には欠かせぬ程に顔が売れ 文秋
老夫婦口絵になって文化財 摩天郎
スクランブルブックから出た谷洗馬 古方
原稿をたき口絵に金をかけ 句楽坊
口絵から真似たスーツが着こなせず 玲人
口絵だけ手垢が付いて売れ残り 市郎
母の眼にニギビだらけという口絵 水客
仏像の口絵で堅い本と知り 白柳
口絵から王長島は切りとられ 高志

兼題「寝返り」 正本水客選

大軒小軒寝返りの右左 八九寸
寝返りが何やら云うてもぐり込み 宗義
狸寝の巧みさ寝返りもして見せる 生々庵
寝返りをすると見られたのが可笑し 旅風
寝返りを打って羽田へかけつける いわを
心境の変化と寝返りさりげなし 雄声
真人間になる寝返りをうつと決め 一栄
寝返りを打てば隣りも打ちかへし 柳雲子
寝返りも前科の数にかぞえられ 一舟
商魂は寝返り打ったと思うてず 八郎
寝返りへ母は根よく蒲団着せ 一栄
この辺で寝返りうったるかと思ひ 同
取れるだけ取った所で寝返りか みさ子
社の空気に寝返りを打った秘書 白柳
卵焼くように病人寝返えされ 保美
寝返りのたんに雑魚寝起される 文秋
寝返ると手剛い彼を知り過ぎる 黙平
寝返りはおきてますよという示威が 梅里
寝返りの約束していたのを忘れ 白溪子
公職を退いたとたんに寝返えられ 野菜
寝返りをされぬ体制とのえる 一栄
寝返りをしたのに妻は気がつかず 柳志
裏面史の寝返るとこで寝返った 古方
寝返りを打ったはずは乳房ゆれ 与呂志
寝返りをした熟睡を見届ける 柳志
寝返る気なのか盃返しに來 玲人
寝返るつもりハイハイと逆らわず 水京
寝返りへ母は気遣う声をかけ 白柳

寝返りをなだめについて阿呆にされ
病人の機嫌は寝返り打つてみせ 水客

兼題「面接」 吉田圭井堂選

面接によんで財力さぐられる 庸佑
面接の自信は爪を切っている 水客
面接はあつけないのも不安なり 野菜
お辞儀まで教え面接送り出す 清子
ひやかしの面接だなどすぐわかり 白柳
面接へ寄附金の額定めて出る 専翁
よそ行きの顔で面接かしこまり 良
面接は五分と勿体つけておき 雄声
面接で常識にない虚を突かれ 文秋
お茶漬で母落ち付かぬ面接日 与呂志
他所行きの顔で面接しおらしく 井平
面接も考査もコネの義理で受け 静馬
面接へずらり並んだ顔と顔すゝむ 白溪子
面接へ訛りの点でひっかかり 雄声
面接は戸籍係のように聞き 文秋
面接で間に合わんだ予備知識 文秋
面接のコツB.Gの姉にきき 静馬
面接で一番痛いところつかれ 客遊子
B.Gの採用面接の役買うて出る 高志
面接の手持無沙汰へお茶がくる 梅里
面接日吹かせどたばこ輪にならず 一舟
面接だけは来いとてつかいコネがあり 水客
ありふれた問いに面接固くなり 井平
お転婆も面接所ではかしこまり 一舟
面接のソファー深うてこわくなり 柳志
面接へ磨けば光る娘もまじり 水客
面接で一席ぶつてみとめられ 水客

席題「8ミリ」 西いわを選

8ミリを見せてもうろうとよばれて来 静馬
8ミリの三三九度へ笑い合い 客遊子
8ミリのスターにババもなつてやり 保美
御自慢の外遊また8ミリ写させる 雄声
8ミリへお祭りモデルになる速さ 白溪子
8ミリのええのがおまに引つかり 多久志
子を寝せてから8ミリを映して見 柳志
8ミリはアソコ上手な子から撮り 東天紅
肝心のところで8ミリ切れてる 柳安子
色直した8ミリの前に立ち 井平
うつされる8ミリ少しかたくなり 白柳
8ミリへ効果を入れて叱られる 玲人
8ミリに母のかんろくヒツツから メ女
新調の8ミリ肝心な処でつかり 与呂志
新米の8ミリ足が切れ顔が切れ 白柳
8ミリの主役はにやけている赤ちゃん 玲人
逆光の中で8ミリ位置を替え 舟遊
8ミリへ白慢のバラが花をつけ 舟遊
8ミリへ一度橋を渡らせる 水客
席題「唄声」 八木摩太郎選
唄声は娘が混りはずんで来 野葉
唄声に喜怒哀楽の顔を変え 文秋
唄声も三味もわびしい雨つづき 静馬
唄声が唄声を呼ぶハイキング 柳安子
家内中唄声一つになる平和 一栄
嗜好の歌声までも親に似て 多久志
唄声へとけ込む若さ愛まれ 柳志
あの声で春日流とはなさない 圭井堂
キャンソフイヤー歌声いつまで続くやら 庸佑

看護婦宿舎からコーラスが聞えてき

唄声は浴衣揃うた盆踊り いわを 水客
唄声が小さくなった丸木橋 玲人
唄声が揃わぬ一人混血児 同
同じ歌二十才は二十才らしい声 多久志
唄声のと切れたところで酒にする 市郎
コーラスの何やら唄うバルコニー 黙平
唄声もストップ社長お帰りや 良
ネタ切れてまた炭坑節に舞いもどり 静馬
故郷で聴いた今年の田植え唄 専翁
唄声に音痴は音痴なりのパス 与呂志
低音の唄声ビントはずれかけ いわを
笑うにも笑えぬ社長の唄を聞き 柳安子
唄声に手拍子合わす鱧すくい 井平
炭坑の奥から唄声聞えてき みさ子
茶摘唄こゝから宇治の声になり 梅里
声変わりした唄声をきゝとがめ 客遊子
二三間あとから唄声ついてくる 水客
ハイカーの疲れをかくす唄になり 柳志
唄声に乗る十代に夢があり 文秋
唄声へマイク下げさす子は五つ 摩太郎
席題「手掛り」 傍島静馬選
国訛だけではたい捕状も取れず 圭井堂
手掛りへ貴重な髪の毛を拾い 玲人
落ちていた判で琉球人と知れ 黙平
手掛りのとれ尻切れトンボなり 柳安子
遭難の手がかりもなく一周忌 雄声
手がかりも無いのに騒ぐ事件記者 摩太郎
手掛りは汽船に乗ったところまで 白柳
誘拐の子の手がかりに母はやせ 雄声

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区薄蔵町5 (361) 9373代

支局 東京都千代田区神田蔵前町2 (291) 9629代

名古屋市昭和区村田町2 (88) 9069

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

これからは徒歩緑蔭にバス停る 生薑
雨は緑に降つてアオ蛙の卵生む ゆきこ
みどり蔭ひそと無頭の仏たつ 一窓
葉ざくらの下に立よとぞ別れる気 甫三
女世帯印鑑証明いる事件 王石
印三ついる日の家庭裁判所 美佐緒
拇印押して次は手錠が待っている 鳥雀

放免をして手掛りを尾行する 専翁

裏付けの無い手掛り又も消え 一栄

手掛りへあの人この人呼び出され 客遊子

手掛りもなくコネもなく平社員 圭井堂

手掛りも無い儘入試の日が迫る 柳安子

手掛りも次々白となるあせり 玲人

手掛りへどのいつもこい固い口 野迷路

手掛りはちびの片言からつかむ 玲人

手掛りを求めてくぐる縄のれん 水客

手掛りの一つに名刺持ち歩き 水客

川維 米子支部句会 (米子市)

人間をうたがい人間判を彫る 和三部
年金の外に用ない判となり 句業坊
印肉の詰った印で保証され 紅鳥
死亡〇の日鴉アスファートを歩き 司郎
変人と呼ばれ都会で鴉飼う つる子
休んでる噴水を鳥がのぞきこむ 紫蘭
むなしさを鴉が歩く屋根である 磯
切株で鴉と一緒目刺食う 枯粒
鴉が鳴いて駅長ホームを掃いている 極堂
蒟蒻に悪目があった針供養 高雄
コンニャクにまで月給を笑われる 幸男
まな板が切れているこんにゃく 晴芽
榮養士蒟蒻の味にはふれず 白扇
川維 出雲支部 (出雲市)

尼緑之助報

若秩父のような女に恋をされ 無閑
火星ふと歴史を変える星を見る 一机
保険屋と知らず応接間へ通し 一保
上段の女が気になる寝台車 鶴丸
コーヒーの味が孤独に染んで来 虞究
ストもなく中小企業火の車 詩郎
三味線の音が夜風を寒くする 吾柳
小説と思えず私を振り返る みどり
女つれ横目でバーの灯をながめ 一男
貯金する楽しさ利子を計算し 忠之
盛装のおくに偽る心もち 幸子
偽の病氣へ見舞がやってくる 秀峯
相談の頭がそろろう 善後策 祥月
相談へ行き座布団へ浅くかけ 雄々
川維米子支部

全山陰川柳大会 (米子市)

小西雄々報

真ん中の娘が憎くいほど綺麗 鶴丸
宿題も助ける親が必死なり 照路
答弁へしきりにメモが渡される 緑之助
百までを子供と数え湯を上り 晃男
百までは生きぬと保険屋が力み 弘朗
真ん中の招待席が空いており 白溪子
真ん中の方で野次った反主流 一保
痛いとは言えず相手は美人なり 独歩
もう一度助けてほしい立候補 蛙眠子
痛いところ突かれ怒ったのが不覚 越山
親切な言葉が痛いほどこたえ 水客

野良犬をおどすつもりが吠えつた 壯
自己宣伝しつこくやって落選し 奎
想像は自由ですよと夜の微笑 永断
途中から邪魔が入った金儲け 可明
裏切ったのが一人いた多数決 水鏡
言うだけは言わしておいて多数決 天邪鬼
言訳に頭が痛い月給日 詩郎
中退の学歴いままつきまとい 貞山
オブライートのどの途中でひつかり 生薑
観光の途中でストのニュース聞く 忠之
百点のとれた日元気なランドセル 可住
百円の賽銭ちよつと考える 利徳
百点の答案だけを綴り込み たつみ
無責任な男ばかりの多数決 紅月
こねるのはごねさせて置く多数決 車葉齊
生甲斐を助ける側になって知り 八歩
国民の不満が痛い捜査陣 明朗
頭痛膏マダムに今日は南風 素瓢
数学が推理小説ほど解けず 耕三
裏面工作したとは知らぬ多数決 篤司
手を上げてあたり見廻す多数決 勇
お百度の母が生きてる大鳥居 若人
予言して押す羽目になる認印 三雷波
がめつさの妻に病む身を助けられ 無閑
痛いところ突かれて口止め握らせる 一机
百万円かぞえて行員無表情 晶晶
頂上へ来て途中の苦勞忘れさせ 昌
お迎えに行った途中ですれ違い まさよ
真ん中の僕が犯人かと聞かれ 客遊子
痛いところ突かれ大臣秘書を呼び 雄々

お手盛りで歳費がきまる多数決 日満
百問は一見出歩く婦人会 節枝
一寸助けてなどと娘が無心に来 万
多数決少女の数にしてやられ 久米雄
顔色を読むのも混せて多数決 千翁
学会の予言はかたい票を読み 新雪
多数決庶民の声は無視されて 昭夫
いたずらをほめてやるのも逆効果 布堂
途中からコップに変える左きき 吾柳
痛いところ突かれ男ののが笑い 幸子
雨続きそう日曜のプラン替え 孤呂二
逆効果一夜でお岩になろうとは 乱坊
母の顔見ながら痛さもりかえし 敷耕
川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

いつからか趣味がもうける煙草銭 万里歩
ホームバー主人の趣味の蘭の花 峯円

色紙短冊
書画用品

大坂戎一

丹月堂

電中セニセニ

何でも屋あれも趣味ならこれ趣味 平八郎

結婚十年趣味も持たずに又孕み 魔花麗

インタビュ紋切型に趣味を問い 曉舟

釣りの趣味余生のんびり糸を垂れ 柳葉

笑うがそしうがままよ俺の趣味 あき坊

貯めたらし書画骨董が趣味という 浅太

蒐集の趣味に利欲がついている 笑有

趣味人の集い生活の苦は忘れ カロ女

同趣味の夫婦で家庭波静か 泉水

口程でない奥さんの趣味の琴 押山

川雑 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

はろ酔いがロマンチックな事を言い 昌

集金の旅一泊でまだ済まず 明朗

一泊の旅行にお守りまでも入れ 清泉

はろ酔いがいい父ちゃんになつて 綾美

はろ酔いのおぼろ月夜の片思い 勇

はろ酔いで満足出来る性質でなし 利徳

はろ酔いの一人笑いがおさまらず あきお

はろ酔いの唄春風に乗ってくる 祥月

川雑 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

陽炎に鯉をゆっくり振りあげる 照路

陽炎の野にねむる山羊が居る 胡風

陽炎へ又一枚を脱ぎ捨てて 一声

陽炎をねむ気の覚めぬ目でみつめ 東岸

陽炎の中動くともなく動き 芳月

陽炎の燃える向うに精神科 秋月

親馬鹿のタイプに知らず知らずなり 久米雄

古釘が馬鹿になったか欄が落ち 良江

馬鹿だとも言えずのんびりして居ます 良子

高笑い親馬鹿振りをさらけ出し 宗義

馬鹿役を芸の達者が引き受ける のぶ子

いさかいは私も馬鹿でけりがつき 真奇

馬鹿なれど顔にニビも出てる青春 水仙

馬鹿がうと思ふは手剛い事を言い あやめ

色話口について馬鹿にされ 幸仙

忠犬を人間さんが手本にし 三六

夫婦でも夫に見せぬ文もあり 安丘衛

川雑 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平報

床の間へすわったものの芸もなし 六角

団体の荷は床の間に積みかさね 雅城

床の間は客があるらし湯がたぎり 味平

女連れ出発時間をまだしやべり 光郎

出発の間を縫ってインタビュ 酔羊

川雑 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

同情の涙が愛につながる日 青竜子

同情はするがお金は貸しません 幸葉

同情で夫婦になった愚痴を聞き とほけ

愛仁園人の善意を温う着る 寛

さ向いし氣力が足りぬなと思ひ 斐山

さし向い師の真剣な目に詫びる 利子

山海の珍味はいらぬ友が来る 十面子

酒飲まぬ氣むすかしさえ妻のち 松風

個性的知的美人で無い証拠 温夫

玄関に今日も親子の無事な靴 竹比呂

健康の外は取柄のない夫 鯨太

訪問で知る貧しさへ師の厚意 勝子

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

森下愛論報

盲点が指摘されてる部長室 春雄

盲点があつたと知らぬお人好し 竹莊

手続の盲点急患はつとかれ 草右

愛人に店を持たして稼がせる 夏生

愛人に会えぬま、嫁く腫ぬれ ハナ子

六十になつても愛人はいいなり 幸男

愛人のつもりで嫁嫁入し 宏子

愛妻には近かれ愛人にはふられ 風仙洞

愛人が出来て嘘うまくなり よしを

スランプでつせと云ひ乍らく稼ぎ 愛論

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

無免許が前を行きますおそろし 宏子

無免許の恐さラッシュに教えられ 和郎

頼つた大先生が無免許とは 専翁

無免許と知らずにゆれるマスコット 圭水

無免許と知れてもあとの祭の死路 郎

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

ババママが日本語で通る困地族 静林庵

ステレオを困地の意地にかけて買い 尚史

土恋し困地に今日を住みなれて 花梢

集金員うらむ困地の壁一重 栄一郎

救急車困地のまどがみんな空き 雄声

妾宅のよい灯かげに乙な三味 半月

大成功妾一ケン家を持ち 吉太郎

奥様はもと妾宅に居った人 八郎

妾宅でババはまき割り風呂もたき 周一

買うたがな買うたがなと二号邸 摩太郎

公約の半分も出来ず四年が来 幸吾

半分を半分にする子沢山 美代

半分はよくも手伝う後家の世話 東雲楼

表彰へ桜の雨もあたたかし きはち

賞状についた一封にチャームされ 菊代

賞状が部屋一ぱいの子は選手 ふじ

明和川柳研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

飯食って帰れと口元は何も聞かず 新子

結局は飯につながらぬ絵に終り 薫風子

押しすしのうちに土工のめしを入れ 菁風

川柳鳥ヶ辻青葉吟行 (大阪市)

恒例の青葉吟行を五月二十五日午後から京都の鴨川荘で、開催しました。連日の雨で気づかれた天候も快晴となり傘が荷物となった。

出席者
路郎先生・宏子・春雄・草右・春巢・竹青・竹荘・史葉・夏生・路兒・幸男・愛論

兼題披露後、路郎師の柳話があり、つづいて全員対抗相撲時は京都にゆかりの題ばかりで中々佳句もありました。春巢さんが優勝され夕刻に鴨川荘の幕を閉じ自由行動となりました。

舞妓あげた昔話に花が咲き 宏子



写真説明 (上) 向つて左から春巢・春雄・草右・路郎・宏子
(下) 向つて左から愛論・路兒・まさる・夏生の諸氏

鴨川の河原は昔の水の色 草右

東山昔と同じ暮の鐘 同

おんがした子へ大文字見せてやり 同

京みやげのいあの娘もハッ橋下っている 同

吊鐘へ小石を投げている二人 同

御所の庭大阪弁ではめそやし 春巢

京染を着せれば妻も見直され 同

(大原女) 大原女はツイストまねた歩きよう 草右

取直し (八) ハミを持ち大原女の尻をこり 春巢

(金閣寺) 金閣寺もう弁当が気にかゝり 春巢

飯を食い終って恨み心が消えていた 夢虹

一度めし食おうやないかとそれつきり すゝむ

四ツ角で小犬はすこしかんがえる 正裕

四ツ角のなじみの家もビルになり 行人

半分しか出ぬボナナスへ迷う妻 一笑

迷いそなとこに立つてる道しるべ 半歩

まだ迷う上でメニユーが笑つてる ホルモン
何一つ迷うことなし出勤す 千尋
黒柿の活字になって友は去り 正雪
校長の柿にはまった名訓話 修見
それぞれの生活の柿へ人の運 和三郎
柿内の費用で済ます名幹事 悦郎
柿のある旅行夜汽車で帰って来 清二
黒柿に友の名を見る夕刊紙 大丘子
黒柿の中から文句言いたそう 山友
色街は朝顔などに用はなし 芳助
黒き種子朝顔化けに化けはる 生薑
朝顔におもうぞんぶん新呼吸 草人
朝顔のつぼみ数えて朝を待ち 民子
朝顔の陽よけ涼しい路地にする 一夜
絵日記に待つ朝顔が咲いた朝 正裕
朝顔に開く様ありじつと見る 三舟
朝顔の五四葉書も夏らしい 梅志
朝顔がもう咲き切つて秋近し 弦月
朝顔を毎年 同じ垣に植え 蝶花
夏のひざしうけ遠くの山かすみ せい子
釣鱸有料女が釣つたにぎやかさ 舟遊

あすなる川柳会 (大阪市)

山本素郎報

修繕のきかぬ時計だ流しとけ 梅里
時計見てまた吹殻をふみつぶし 酔泉
マスコミがおしやれのデンプオ早めさせ 水邦
目覚しが鳴りつづけてる春の朝 幸児
上役の醜聞酒のさかなにし 百酒
貴婦人になりそこなつたスキャンダル ゆきを
スキャンダル持たぬ夫でものたらず しげ子
エンドマーク出ても余情に立ち難く 福郎
かけだしがスキャンダルから役が付き 尤三
石一つ金魚に夢を入れてやり 慶之助
ピクニック誰れも缶切り持つて来ず 素郎

宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

大萬

料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇

TEL (七三) 三九三五番

龍の店 アベノ橋近地下食通街

TEL (七三) 〇一四七番

串の店 南区豊屋町三ツ寺センター

TEL (三三) 九一八四番

麻生路郎著 好評噴々

新川柳鑑賞

川柳の味い方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとした

ものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

大蔵省印刷局代印五丁二五番
発行所 川柳雑誌社

価格大判(671)六〇一八
郵送料大判(七五〇)五〇

麻生路郎先生著

川柳とは何か

川柳の作り方と味い方

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。

絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味い方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

価
二五〇円
送費
七〇円

取次所

川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

会長・麻生路乃女史

川柳婦人友の会を募る

川柳雑誌社内 川柳婦人友の会

入会希望者は往復はがきで……

連絡事務所 大阪市南区ニッ井戸町23

山川阿茶

C・M・C 児童音楽サークル

指導 麻生アート 外敷氏

千林教室	大阪市旭区北清水町九六	北清水集会所	バイオリン科
あびこ教室	大阪市住吉区南住吉四ノ一	あびこ幼稚園	バイオリン科 電話1874
西九条教室	大阪市西九条	防犯会館	バイオリン科 電話9836
生駒教室	奈良県生駒町北新町	文化会館	生駒2027

バイオリン・ピアノ・声楽・チェロ・特設バレエ科

★サークルに所属するお問い合せは左記へお願いいたします

奈良県生駒町本町二〇三

電話生駒(〇四三七)二〇二七

主宰 麻生アート

Printed in Japan

発行所 川柳雑誌社

電話大判(671)六〇一八
郵送料大判(七五〇)五〇

川柳雑誌 第三十八号

定価 九〇円

(禁転載)
半力年 五七六円
一力年 一〇八〇円

昭和三十八年六月廿五日 印刷
昭和三十八年七月一日 発行

大阪府住吉区内方代西三丁目二五番地
行印刷人 麻生幸二郎

募 集

課題吟募集

マイナス (十句以内) 中島生々庵選

根 雲 (十句以内) 野村味平選

退職 金陽 (十句以内) 直原七面山選

立 陽 (十句以内) 菊沢小松園選

近作柳樽 (雑詩十句以内) 北川春巢選

文 柳塔 (雑詩十句以内) 麻生路郎選

章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選

投稿規定

投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名推号を明記する事。

「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。

「課題吟」は誰でも投句が出来る。

「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿八年七月一日 発行 毎月一回一日発行

編集 兼 兼
発行印刷人

執筆 兼 兼
兼 兼 兼

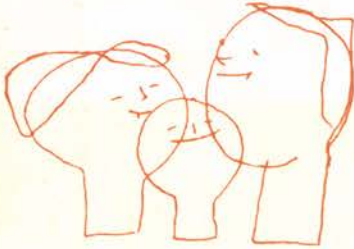
川柳雑誌社

大阪市住吉区西宮代五丁目三番地 電話大阪 671-6081

郵政省認可大正七五〇番

定価九十円(送料六円)

一家そろつてホーライ完



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2

貫禄は充分です

樽で貯蔵しはじめてから40年...

まろやかな味!

ふくよかな香り!

すべてが完璧なウイスキーです

サントリー



ロイヤル3,000円 オールド1,600円
角瓶1,280円 白瓶750円

サントリー

世界の名酒



新和歌遊園

ロープウェイ

新和歌浦を一望におさめた空中散歩 高津子山へのスカイラインは四国淡路の連山も手にとるようです

料金 往復大人70円 小人36円
食堂 売店 駐車場 散歩道他
和歌山市駅下車電車又はバス
回転展望台大人30円 小人15円

南海電車

Toray
Reg. Trade Mark



東レ
レインコート
EASYCARE / 手のからないせんい

東洋レーヨン株式会社